

アジアと女性解放

Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

〒150 東京都渋谷区桜丘14-10 渋谷コープ211号
TEL & FAX. 03-3463-9752

特集 タイ女性なぜ日本に？

- 人身売買の構造
- 殺し殺されるタイ女性たち
- 開発・企業進出・ODA
- リトルバンコク・エイズ・タニヤ通り



逐次刊行物
平成7年8月28日
国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

No.21
1992.11

¥500

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして!

メーサイ

夕暮れ 空に陽の光が霞み
太陽が地上から姿を消して
やがて月のぼろぼろ
空を飛んでいた鳥たちは
みみ森のぬぐらへ帰って行くのに
どうしてあの娘はもう何年か
家に帰って来ないのだらう

田圃はあの娘をすびりがついて
家も冷たい風に吹かれて壊れそうだが
老人たちがうらな目ですわつて
村々の可愛い鳥たちの値は安く
あの娘は父と母に売られていった

父と母の恩がどんなに大きくても
メーサイの娘たちは 汚れた社会へ入っていく

気づいたときはもう遅すぎ
体の上を通り過ぎた、幾千の男たち
閉ざされた心の傷は癒えず
いくたびとなく人に虐げられ
冷たくなったその心は
故郷に帰ることも思わず
麻薬に酔い、こころ願うだけ

あふく、老父が倒れたと知らず受け
間に合ふこと祈ってバンコクの街から
薬や衣類、檳榔、キンマを送ってみるが
やつと彼女自身が家に帰りついたら
「遅れてきた母」といふ故郷の名の通りに
間に合ったのは たゞお経の声だけだった

北の娘の心の傷の深さを だれも語りはしない
そんなタイの社会に人に聞かせない
おそろくだれも信じてはすまい
蘭の花のようになあ娘たちが
生きた糧を求め
他所の男たちへと売られていくの

詞／曲／唄 タイ・カラバオ楽団
訳 山本博史



タイ女性なぜ日本に？

この詩にあるメーサイ(タイ北端の国境地帯)の娘たちは遠い日本にまで来ているのでしようか——バンコクの数分の一の収入しかない北部の村々から日本にまで送られて来るタイ女性たちは、商品として人身売買されているのです。それゆえに現代奴隷制といわれるように、さまざまな人権侵害を受け、最悪の場合は殺されるか、あるいは、殺して逃げられない状況に追い詰められています。手錠腰縄で法廷に引き出される若いタイ女性たちの姿に、彼女たちはなぜ日本に来なければならなかったのか、考えさせられます。

その背景には「日本がタイを丸焼きにする」ような日タイの不平等な経済関係があり、性の商品化を煽る買春社会があります。

「私たちは人間です」というタイ女性の悲痛な叫びを耳にして、支援活動が続けてきた私たちは、その叫びにもっと多くの人々が耳傾けてほしいと、この特集をまとめました。経済大国日本の繁栄の裏に隠されたタイ女性をめぐる状況を知り、私たちと行動を共にして頂きたいと思えます。

一九九二年十一月

タイ女性の人権を守ろう！

アジアの女たちの会

PART I 日本へ来る タイ女性はいま.....

私は人間なのです.....

だまされて日本に売られたすえに

人身売買の構造

村田 則子

「一九九一年三月一日、わたしは日本に来ました。ついては、自分は売られたことを知りました。それは家畜のような生活でした。本当は人間なのに。結局わたしは三度売られました。売られたと分かって、そんなことは望んでいないことでも惨めてました。それでわたしは彼女に家に帰してくれと訴えました。私は彼女が私を引き取った最初の人に会いました。でもボスはわたしをそこから帰してくれず、彼女に借金があるから、お客をとって働かなくてはならない、と言いました。つまり、男性と寝に行き、その人の言うことをなんでもすると言うことです。その時から自由のない生活になり、ののしられ、いろいろなことを強制されるのを、我慢しなければなりません。たとえてできないことでもやらなければなりません。皆さん、ここではとても辛いことですが、本当にひどいもので、惨めて自分が哀れてました。口がきけず、目の見えない人間のような生活で、手足を縛られているようなもので、どこへも行けません。店とホテルしか知りませんでした。肉体的にも精神的にも、自由の無いことがとてつらかった。六か月半生活は彼女の手で握られていました。実際にやらされたことは私の気持ちにまったく反するもので、私は全然やりたくないことだったのです。毎日毎日我慢して男性と一緒に寝なければならませんでした。休んだこととはありません。生理のときも休ませてはくれませんでした。生理のときも男性と寝なければならませんでした。どんなに痛くても我慢しなければならませんでした。高熱があっても、鼻水がでて咳がとまらなくても、男性にサービスに行くのです。休ませてと言っても休ませてくれません。彼女はとても意地悪だということがよく分かりました。人への思いやりがまったくなく、他人の体を痛め付け自分が儲けることだけを願っているのです。

人生とは家畜のように生きることでないでしょうか？ 虐げられ身体と心を脅かされるために生まれてきたのではありません。人生というのはすべての人それぞれの自由があるべきものではないでしょうか。同じ人間の体を使って、お金を儲けることしか考えない女性から逃れる方法がほかに何かあったのでしょうか。逃げたかったけれどできません。もし逃げようとしたら、どこへ逃げてボスが殺しに行く、絶対にそうすると脅かされていたからです。タイにいる両親も殺すと言われました。タイでは殺し屋を雇うことはとても簡単です。下館事件の被告の一人から弁護士、支援団体あてに送られた手紙(抜粋訳・大倉弥生)

八〇年代初めからフィリピン女性が日本にくるようになり、八〇年代後半からはタイ女性が急増した。さらに昨年(一九九一年)から今年にかけて、タイ女性の殺人事件が頻発している。そのほとんどのケースがタイ人同士でスナックやバーで働いている女性たちがひき起こした事件である。

ある調査によると、今年の一月から九月までの間にタイ女性が関係した殺人事件が全国で一〇件、昨年同期の二倍である。タイ女性が絡んだ事件が一番多かったのは長野県でついで、千葉、茨城、三重、静岡の順だろう。オーバーステイのタイ女性性は推定二万五千人から三万人、年間では五万人を越えると言われている。タイ大使館には一か月平均三〇〇から三五〇人ものタイ女性が逃げてる。

九一年九月、茨城県下館市内のアルバイトでボスのタイ女性が同じ店で働いている三人のタイ女性に殺され

た。彼女たちはそばにあったバッグをとって逃げたので、「強盗殺人罪」(強盗殺人罪)は計画的に強盗をして人を殺した、ということでも最も重い量刑で最低でも一〇年、または死刑、無期懲役の実刑判決が多い)で起訴され現在裁判中だが、弁護側は「正当防衛」を主張し、全面的に争っている。

九二年五月東京新小岩でスナックの経営者(台湾女性)が殺され、逃げたタイ女性六人が「殺人」の疑いで逮捕された。五人が起訴され、現在裁判中で、最年少の一五才の少女は家裁に送致され、すでに処分が決められて少年院におくられた。

また、ちょうど、下館事件から約一年目の今年の九月末、千葉県茂原市のスナックで経営者のシンガポール国籍の女性が殺され、姿を消していた従業員三人のタイ女性が「殺人」の疑いで緊急逮捕され、あと二人のタイ女性も指名手配されている。

事件の背景

このような事件に共通しているの

は、ホステスとしてだけでなく、『強制売春』をやらされ、ただ働きを強いられ、動物のように扱われ、ひどい仕打ちをうけ追い詰められたすえに殺して逃げるしかない状況だったことである。さらにその後にはタイ女性が深く存在するのは日本とタイ、および東南アジアを結ぶ『人身売買』ルートである。彼女たちにとって

はまさに生と死の問題であり、裁かれべきは、そのようなタイ女性ではなく、非人間的な人身売買の構造と女性たちを、『性』の対象としてしか見ない、なんの罪の意識もなく平気で買春する男たちである。そしてまるで自分の手は全く汚してないかのよう

裁判支援が大きな力

下館事件では、彼女たちはボスに逃げたら本国に連絡して親を殺すと毎日のように脅かされていた。実際にタイの地方や農村における親と娘の関係は絶対的なもので女性たちは自分の生き方を自ら選択するのではなく、親の意志に従うというのがまだ一般的で、『親を殺す』というのはまさに殺し文句なのだ。

暗躍する人買いたち

タイ女性支援基金を始めた八九年頃はひとりの女性がプロローカーやリクルーターに買われ、借金として背負わされる額は約一〇〇万から一五〇万円だったが、四年後の九二年ではそれが四〇〇万円にも跳ね上がっている。いまでもバンコクの日本大使館は朝八時から受け付けるビザを申請する人たちが深夜から長蛇の列を作り、大使館は整理券を配って対応しているほどだ。その整理券までもが一〇〇〇バート(五五〇〇円)から二〇〇〇バートで売買されており、それでも三分の二位はその日のうちにはビザを貰えず翌日、また早朝から出直し、という状況なのだ。ビザ発給を拒否され脅迫めいた恨みを訴えたり、逆にもっと厳しくしろと言うものや、爆弾を仕掛けたという電

彼女たちは第一回の公判から一貫して殺意を否認し、最近では『他のタイ女性が私たちのような目に遭わないように……』と言って弁護士も驚くほど強い闘争意思を示している。三人のうちの一人は、自分が再び社会に出たらタイからの出稼ぎ女性をなくすために働きたいと手紙に書いてきた。

この事件が起きてすぐに茨城の外国人労働者問題に取り組んでいる市民グループやアジアの女性たちの会が中心になり、支援グループを作った。さらに幸いにもアジアからの出稼ぎ女性の問題に熱心な五人もの弁護士たちがボランティアで弁護活動をひき受けてくれた。彼女たちに異国での長い裁判に闘う勇気を与えたのは支援グループや弁護士の支えが大きな力となり、裁判の支援活動の意義を示してくれた。

現代の奴隷制度—人身売買

日本に働きにくるタイ女性は大きく二つのグループに分けられる。一つはレストランとか工場で働き借金(渡航にかかる費用・その他)はすぐに返すことができる、とだまされて来るケース。もう一つはある程度、売春をやらされることを承知で来るケース。しかし、これ程ひどいとは想像もしていない。あとはおもに、東

北部、北部からバンコクの繁華街で働いた後に、来日する女性が多い。いずれにしても女性性を性的商品としてしか見ない現代の奴隷的人身売買の犠牲者であることに変わりはない。タイ再北端、サイ川をはさんでピルマ(ミャンマー)との国境の町メーサイに山岳民族の少女たちを売春から守り教育することを目的とした施設『少女たちの教育センター』があり、タイや日本のボランティアの手で運営されている。わたしたちがここを訪れたとき、所長は『プロローカーと町の有力者や教師がグルになり、幼い娘たちを売買している。小学校の教室がまるで人買いたちのシヨールームのようだ。プロローカーたちは村の行事や、学校に寄付をし、簡単に彼等を信用させてしまう』と話していた。最近では、『チェンマイやチェンライあたりには若い女性が少なくなり、ピルマ、ラオスの国境付近の山岳民族のみならず、中国南部の雲南省からまでも抵抗できない少女たちが安く買われてくる。そのやりかたもかなりシステム化され、プロローカーたちは、バンコクの仲間たちと少女たちの写真や、サイズをファックスでやり取りして値段を決めている。しかし、いろいろな悲劇が伝わるようになり、少しづつではあるがタイの少女が売春に入るケー

という。タイには日本のように組織暴力団はなく、いわゆるチャイニーズ・シンジケートと呼ばれる中国人プロローカーたちがおり、表向きは旅行者などを装っている。そして実際にリクルーターとして働くのは、もと日本で働いていたタイ女性が多い。この構図は下館事件とまったく同じで、かつては自分も事件の被害者たちと同じ立場だったはずであろう人間がお金のために今度は搾取される側から搾取する側になるのだ。売買春はそれほどにしぶとく一人の女性を縛り付けるのだ。

なぜ出稼ぎ女性は減らないのか

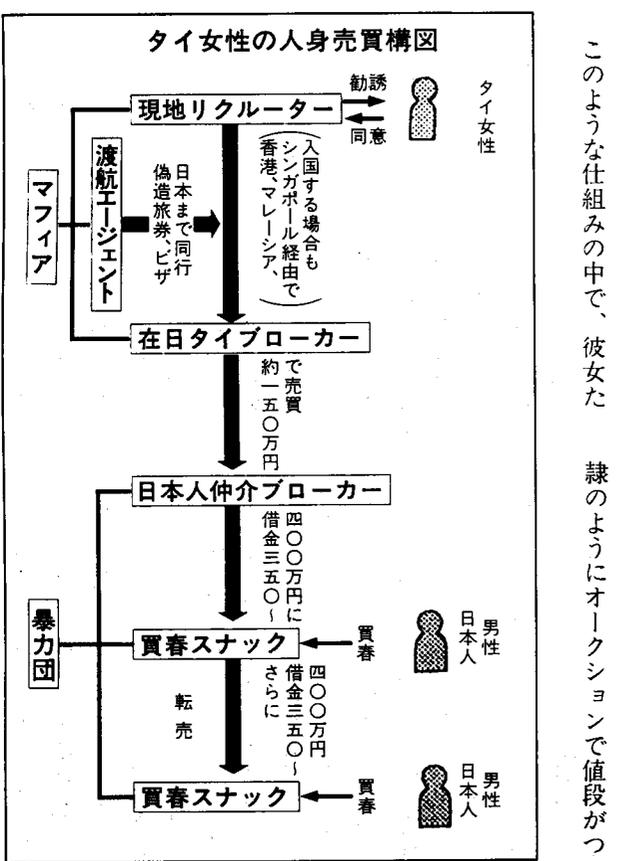
タイから日本への出稼ぎ女性がふえ始めたのは、八〇年代中頃あたりからで、タイが世界に類を見ないほどの急激な経済成長を遂げた時代と呼びしている。しかし、日本で彼女たちを巻き込む事件が多発しているのになぜ出稼ぎに来る女性たちが減

ちは通称『運び屋』と呼ばれるプロローカーに連れられて、夢をふくらまして日本にやってくる。大体は、数人で入国する。プロローカーはそれを隠すために、小さな子供を含めた家族連れを装って来る場合まである。入管で二〇〜三〇万円の現金を見せ、入国手続きが終わったところで、彼女たちはプロローカーにお金を取り上げられてしまう。そしてプロローカーは成田などの空港で出迎えるプロローカーに一人に付き一五〇万から二〇〇万円のお金をもらい、消えてしまう。その後彼女たちは日本側のプロローカーにパスポートを取り上げられ近くのホテルに連れていかれ、まるで奴隷のようにオークションで値段がつ

話までであり、一時はタイ政府の中央犯罪捜査局が大使館の周辺の警備にあたっていた。最近タイ女性がパスポートを取るのには以前ほど難しくなくなったが、日本のビザをとるのは難しく、日本大使館内で職員が汚職をしているという噂もある。そのようにして、ほとんどの女性はプロローカーやリクルーターの甘い言葉にのせられて、多額の借金をして来日する。ある裁判で明らかになったケースは本人が約二〇万円(九一年来日)の借金をして日本に来たという。その内訳は、パスポート一〇〇〇バート、ビザ五〇〇バート、渡航費一八〇〇バート、洋服代五〇〇〇バート、プロローカーの手数料一二〇〇〇バート。手続きはみなプロローカーが行う。それらの費用をすべてプロローカーが払う場合もあり、それが彼女たちの借金として上乗せさせられるのだ。つまり元手はかかるが、成功すれば数百万円が人身売買業者の手元に入る仕組みになっている。ときにはタイ女性を日本に送る斡旋業者に、直接人集めを頼む日本人プロローカーもいる。斡旋料は一人に付き約三万バート(二六五万円)しかしこのようなプロローカーのボスたちは毎月警察に多額の目こぼし料を払っているので絶対に捕まらない

タイ女性 入国する場合もシンガポール経由で香港、マレーシア、日本まで同行偽造旅券、ビザ

男性 買春 男性 買春





日本へ出稼ぎに行った女性が建てた家
—タイ東北部コラート

けられ、三〇〇万円、四〇〇万円で
売買される。日本に住むタイ人ブ
ローカーの数は正確にはわからないが、
一〇〇人以上はいると思われる。そ
の背後には暴力団組織が存在してい
る。そこで買手がつかない女性た
ちはさらにほかの地方へ送られ再び
オークションにかけられる。そのよ
うにしてついでに値段とタイの斡旋業
者に払った値段の差額はすべてブ
ローカーの儲けになる。

人権侵害の数々

彼女たちは暴力団が言う『タック
ス』つまり借金の型にされ、人権を
無視され、実質的には監禁状態に置
かれ、脅迫を受け、暴力を振るわれ
売春を強いられる。動きが悪いとき
には薬をうたされ服従を強いられる。
抵抗もできないタイの女性たちは、
ただ体売ってその不当な借金を返
すしかないという真つ暗闇に突き落
されてしまう。これは紛れもなく性の
人身売買なのだ。このような人身売
買の結果、タイ女性が受けている人

権侵害ははかり知れない。さらに警
察官による売春防止法を適用するた
めのおとり捜査。むりやりに外国人
犯罪数の増加を作り出すための繁華
街の一斉摘発などで、日本国内で今
最も人権が犯されている外国人がタ
イ女性たちであると言っても言い過
ぎでは無いだろう。

リトル・バンコクやリトル・パツ
ポンと呼ばれる、タイ女性が集中的
に住んでいる地域があり、タイの女
性と遊びたければ、どこへ行けばい
いのかすぐ分かるようにさえなっ
ている。その名が示す通り、周辺では
タイの食糧や、洋服、薬(日々の生
活の辛さを忘れるための)などを売
る店や、行商人が商売をしている。

支援運動の広がり

さらにエイズの問題も深刻さをま
してきた。エイズ検査で感染してい
ることが分かって、きちんとした
治療や待遇は受けられず、本人には
知らされないまま、他の店に転売さ
れるケースも多々ある。しかしその
ようなアジア女性の人権を守るため
に市民や女性グループも活発な活動
を行っている。昨年(九一年)の春、
一人のタイ女性がタイにいる夫に『私
は毎日強制的に売春をやらされ、そ
れを拒むと殺されます。今直ぐ助け
に来てください』と悲痛な叫びを訴

えた手紙を書き、それがファックス
で市民グループに送られた。支援グ
ループの連携プレーで奇跡的に彼女
は無傷で無事救出され、一〇日後に
帰国した。それをきっかけに、神奈
川県内で民間ボランティアの手で女
性のためのシェルター作りの運動が
始まり、今年(九一年)九月女性の家『サ
ラー』が開設された。

下館事件の三人の女性たちはいま
では日本語の会話がすっかり上手に
なった。拘留所から翻訳が間に合わ
ないほど、沢山の手紙を書き、切々
と自分たちの状況を支援の人たち
や、弁護士に伝えてくれる。冒頭の
手紙はそのうちのひとりの女性が日
本に来てから受けた待遇を綴ったも
のである。

タイから見た日本は、やはり『金
満ニッポン』なのだ。北部や東北部
の村に行けば、タイの伝統的で素朴
な家々の間に田園調布にでもあるよ
うな立派な家が所々に建っている。
そのほとんどが、出稼ぎ女性たちの
人権侵害の代償なのだろう。それは
まるで若い女性たちに、『あなたも出
稼ぎに行つて立派な家を建てて親孝
行しなさい』と無言で語っているよ
うだ。華やかな建物の後ろにある彼
女たちの辛い日々の体験は決して伝
わらない。

開き、消費文化が隅々まで入り込む
ことにより、伝統的な生活様式が急
激に失われていく。富を求めて、タ
イ女性はこれからも日本に出稼ぎに
来つづけるだろう。だがほとんどの
人たちが自由を奪われ、自分の言葉
で語ることができない『性産業労働
者』として日本の底辺で人目を避け
て、隠れるように生きているのだ。
下館のような事件が起こる前に、も
少しでも彼女たちの心の叫びを聞
くことができたなら、人を殺すまで
に至らなかつたかもしれないと悔や
まれる。とくにタイ女性の場合は英
語もほとんど話さず、仏教徒なので
教会に助けを求めることもないなど
フィリピン女性たちよりもさらに人
権侵害を受けやすい。

裁判にかけられるタイ女性たち

なぜ殺人に追い込まれたか

事件の概要

一九九一年九月二十九日、茨城県下
館市内のアパートで、タイ女性Sさ
んが三人のタイ女性にナイフで刺さ
れるなどして死亡。三人は千葉県で
強盗殺人罪で起訴されました。翌
年二月「下館事件」タイ三女性を支
える会」が発足。現在、水戸地裁下
妻支部で裁判が続行中です。

事件に至るまで

被告の三人は共にタイ北部の農村
の出身です。

Aさんは、タイでMと名乗る女性
から「日本のレストランで働けば金
を稼げるよ」旅費は働いて返せばい
い、渡航手続きはすべて面倒見てあ
げる」と声をかけられた。タイでは、
末娘が両親の面倒を見る習慣があり、
「親孝行」するというのは、私たち
日本人が考えている以上に大切なこ
とのようにです。Aさんが一家を支え
親孝行するためには日本行きは魅力

的な話だったに違いありません。
しかし、成田空港に着いて、Aさ
んは自分売られたのだと気づきま
した。彼女を迎えに来ていたSさん
がMに多額の金を払ったのを見てし
まったからです。Mはタイから女性
を送り出すクルーターでした。

Aさんは千葉県佐原市内のアパー
トに連れていかれ、そこで「おまえ
には三百五十万円の借金がある。こ
れだけの借金は、売春をしないと稼
げない。売春をして早く返すんだ」
と言われました。もちろんAさんの
親も自分自身もSさんから一円だつ
てもらっていません。それどころか
パスポートはもちろん、わずかなお
金だつて取り上げられてしまったの
です。

Aさんは、それから転売に転売を
重ねられ、事件の起きた下館のスナ
ックM(仮名)は五軒目の店でした。
BさんとCさんが来日したのは、
その年の八月でした。Aさんのとき
と同じ様に、レストランや工場で働
く約束でした。二人は、成田空港か
ら東京のホテルにブローカーによつ
て移され、さらにSさんにスナック
Mに連れていかれました。

彼女たちのアパートは2KでSさ
んを含め六人八人のタイ女性が一緒
に暮らしていました。スナックMの
休日は大晦日だけで、病気のときも
休ませてもらえず、生理日でも客を
とらされていました。売春を断ると
Sさんに暴力を振るわれ、客が一人
もないと借金に五千円上乗せされ
ました。もちろん客が出した金は全
額Sさんに巻き上げられました。

Sさんは、彼女たちが逃走するの
を極度に警戒していたようです。彼
女たちから取り上げたパスポートは
常にウエストポーチに入れ身につけ
ていました。また外出も許さず、ア
パートと店と客と一緒のホテルしか



知らせない生活でした。

そして、常に「働かないと両親を
殺す。逃げる」と家族を殺す。タイに
連絡したら別の人に転売する。そう
なると借金は七百万円に増える」と
言われ続けたのです。

彼女たちは、自分自身がこの状況
から逃れるために、そしてタイの家
族を守るための方法を考え、その上
での犯行だったので。

彼女たちは逃げるときに、かばん
とウエストポーチを持ち出しました。
その中に自分たちのパスポートなど
が入っていると思つたからです。七
百万円もの現金が入つていたとは予
想もしなかつたのでした。(もちろ
んこの金も彼女達をただ働きさせて
巻き上げたものですが)

彼女達はSさんから逃れるために
殺したのであり、決して検察側の言
うように金品を奪うために殺したの
ではないと述べています。

逮捕時の問題点

①逮捕令状なしの捜査

被告人らがホテルにいたとき、警
察官らは捜査令状も逮捕令状もなく
ホテルの客室に侵入し、所持品を調
べた。

②通訳もない任意同行は成立しない
被告人らはタイ語しか理解できな
いのに、警察官らは通訳もともなつ

ていなかった。理由も目的も告げられず、強制的に連行された。

「任意同行」、逮捕されてからずっと彼女達は弁護士との接見も妨害され、警察・検察の取り調べを受けていたことが明らかにされています。日本の法律制度や権利をはつきりと知らされないまま、取り調べが行われていた事実は許されることではありません。

また、東京拘置所は一般面会において、タイ語の使用を認めていません。拘置所は「面会者がタイ語を一言でも話したら面会を中止する」としています。拘置所にタイ語の分かる職員がいないことが、タイ語使用禁止の唯一の理由です。彼女達は日本語がほとんど理解できないのに、

裁判は九月二八日に第一回公判が開かれました。弁護士は今年五月に設立された外国人刑事弁護団が担当しています。

警察官らは被告人らを九時間半も拘束し、自供を求めてから、その自供を根拠に緊急逮捕した(令状主義に違反)。さらに緊急逮捕のときは「その理由を告げることが要件とされているが、被告人らは、逮捕すること、逮捕される理由が告げられていない。

以上のように、本件の任意同行および緊急逮捕は違法なもので、得られた自供調書や所持品に証拠能力がないと考えられる、としています。(弁護団より出された意見書から)

翌日の朝刊で逮捕の記事を見た千葉の山田由起子弁護士からその日の午前中すぐにハンド・イン・ハンドは

大島静子さんへ電話で連絡があり、ハンドインハンドからの依頼ということでこの事件の弁護を引き受けてくれることになり、その当日さっそく接見に駆けつけてくれました。警察では「本人の意志を確認してから、本人は会いたくないといっている」などと言われたが、結局大原署、茂原署で接見することができました。

先にも述べたように、彼女たちは決して金品を盗むために殺人を犯したのではなく、逃げるためであったこと。そしてなによりもその様な状況におかれた日本、タイ両国の人身売買の構造と強制売春の実態の究明に焦点を当ててほしいと思います。

また、何よりも私たちが驚かしたのは、少女売春の一五才の少女がいたことと、もう一人、一六才の少女がこのスナックには雇われていた事実です。

彼女達は第一回目の裁判で殺意を全面否認しました。

他のアジア国籍の女性だと言うことです。彼女たち被害者もかつては人身売買で来日し、暴力団など日本人の妻やパートナーにされ、組織に管理されていたのでしよう。加害者も被害者も共に苦界に放り込まれ、逃がれる術を持っていなかった人々たちです。その背後にいる互いの加害者である日本人は、裁かれないのです。

この茂原の事件も、下館や新小岩の事件と背景はほとんど同じです。自首した三人の女性の一人Aさんは、タイ東北地方出身でバンコクに隣接する工業地域のトリ肉工場で働いている時に日本でのウェイドレスの仕事に誘われ、今年四月来日しました。成田に迎えに来た男からさらに茂原の駅前に迎えに来た男に渡され、事件の起こったスナック「港」に一七〇万円で売られ、その日のうちから客を取られました。借金は三八〇万円、もちろん売春で返さねばならず、食事なども借金に入られていきます。彼女たちは店の二階で起居し、店の裏口にはビデオカメラが取り付けられ、扉の開閉をするとブザー音がなるというような厳しい監視を受ける生活でした。彼女たちにと

って、この状態から逃げるためにどうしたらよいか、との問いに対する答えは一つしかなかったものでしょう。十月一日現在、三人は警察の取り調べ中ですが、弁護士との接見の時には比較的落ち着いた態度で事件について話をしてくれます。また、「警察の調書は最後にきちんと通訳に訳してもらっているか」と聞いたら「きちんとやってもらっている、違うという訂正をしてくれ」と答えていました。起訴後、三人は千葉拘置所に移されることになるでしょうが、それから彼女たちにとって長い日々となります。日用品の差し入れや面会、裁判の傍聴などの支援活動を行っていきます。

タイ女性が絡んだ事件や裁判には、共通点が多いことに驚かされます。被告となった女性たちは、共に多くの借金を背負わされ、借金がなくなるまで売春を強制され、ただ働き。タイ女性を売り買ひする大がかりな組織、ブローカーの存在。彼女たちが逃げ出さなためか、生活は「中間管理職」のママに厳しく見張られ、まったく自由がなかったこと。

彼女たちは飽食の時代といわれる豊かな日本に暮らしています。そんな私たちにあって、刑事事件を起こしたり、ましてや人を殺すなんていうことは考えられず、それは「悪い人」のことで私たちには関係ないことのようにも思えます。しかし果たして本当に関係ないのでしょうか。彼女たちを含め、現在何万人も滞在しているといわれるタイ女性たちは自国で食べていけないだけの仕事があったら日本まで来ることもなく、そして彼女たちを買う男性がいなければ彼女たちを売買する組織もなかったことでしょう。ましてや一五、六才の少女までが日本で人身売買されてくる事実はどう考えればよいのでしょうか。

このスナックには雇われていた事実です。

彼女達は第一回目の裁判で殺意を全面否認しました。

他のアジア国籍の女性だと言うことです。彼女たち被害者もかつては人身売買で来日し、暴力団など日本人の妻やパートナーにされ、組織に管理されていたのでしよう。加害者も被害者も共に苦界に放り込まれ、逃がれる術を持っていなかった人々たちです。その背後にいる互いの加害者である日本人は、裁かれないのです。

彼女たちは飽食の時代といわれる豊かな日本に暮らしています。そんな私たちにあって、刑事事件を起こしたり、ましてや人を殺すなんていうことは考えられず、それは「悪い人」のことで私たちには関係ないことのようにも思えます。しかし果たして本当に関係ないのでしょうか。彼女たちを含め、現在何万人も滞在しているといわれるタイ女性たちは自国で食べていけないだけの仕事があったら日本まで来ることもなく、そして彼女たちを買う男性がいなければ彼女たちを売買する組織もなかったことでしょう。ましてや一五、六才の少女までが日本で人身売買されてくる事実はどう考えればよいのでしょうか。

新小岩事件

事件の概要

今後の裁判に望むこと

弁護士の接見の妨害

茂原事件

事件が起きている状況

タイ女性をめぐる主な事件、事故

新小岩でスナックの経営者(台湾女性)が殺される事件がおきました。翌二日に本多警察署は「任意」で事情聴取していたとされる、被害者の店で働いていた六人のタイ女性を殺人の疑いで逮捕しました。六月三日には、そのうち五人が起訴され東京拘置所に拘留され、残る一人はまだ一五才の少女で、家裁に送致され、すでに処分が決められて少年院に送られています。

彼女達も、下館事件の被告と同じように、殺された台湾籍のママに厳しく管理されていたようです。外出は禁じられ、給料も支払われず、タイ語を使ったり、サービスマスが悪かったり、泣いたりすると十数万円の罰金が課せられていたとのこと。

また、何よりも私たちが驚かしたのは、少女売春の一五才の少女がいたことと、もう一人、一六才の少女がこのスナックには雇われていた事実です。

九月二八日に第一回公判が開かれました。弁護士は今年五月に設立された外国人刑事弁護団が担当しています。

被告のうちの一人は、持病があり、足も怪我をしていて、裁判中も苦しんでいました。しかし拘置所内では満足に医者にもかかっていたいないとのこと。日本はまさに人権後進国です。彼女達は第一回目の裁判で殺意を全面否認しました。

事件が起きている状況

この茂原の事件も、下館や新小岩の事件と背景はほとんど同じです。自首した三人の女性の一人Aさんは、タイ東北地方出身でバンコクに隣接する工業地域のトリ肉工場で働いている時に日本でのウェイドレスの仕事に誘われ、今年四月来日しました。成田に迎えに来た男からさらに茂原の駅前に迎えに来た男に渡され、事件の起こったスナック「港」に一七〇万円で売られ、その日のうちから客を取られました。借金は三八〇万円、もちろん売春で返さねばならず、食事なども借金に入られていきます。彼女たちは店の二階で起居し、店の裏口にはビデオカメラが取り付けられ、扉の開閉をするとブザー音がなるというような厳しい監視を受ける生活でした。彼女たちにと

タイ女性が絡んだ事件や裁判には、共通点が多いことに驚かされます。被告となった女性たちは、共に多くの借金を背負わされ、借金がなくなるまで売春を強制され、ただ働き。タイ女性を売り買ひする大がかりな組織、ブローカーの存在。彼女たちが逃げ出さなためか、生活は「中間管理職」のママに厳しく見張られ、まったく自由がなかったこと。

私たちが飽食の時代といわれる豊かな日本に暮らしています。そんな私たちにあって、刑事事件を起こしたり、ましてや人を殺すなんていうことは考えられず、それは「悪い人」のことで私たちには関係ないことのようにも思えます。しかし果たして本当に関係ないのでしょうか。彼女たちを含め、現在何万人も滞在しているといわれるタイ女性たちは自国で食べていけないだけの仕事があったら日本まで来ることもなく、そして彼女たちを買う男性がいなければ彼女たちを売買する組織もなかったことでしょう。ましてや一五、六才の少女までが日本で人身売買されてくる事実はどう考えればよいのでしょうか。

タイ女性をめぐる主な事件、事故

- 1991 1.10 新宿大久保でタイ女性殺される★
- 26 宇都宮のホテルでタイ女性殺される★
- 3.25 オーバーステイのタイ女性飛び下り自殺(大阪)
- 5.2 強制売春をさせられていたタイ女性から依頼があり救出(茨城県)★
- 7.21 三重県警警備隊員が保護したタイ女性2人を暴力団に引き渡していたことが発覚
- 9.29 タイ3女性、同居のタイ女性を殺した容疑で逮捕される(茨城県下館市)★(下館事件)
- 10.14 タイ女性、同居のタイ女性を殺した容疑で逮捕される(東京新宿)★
- 10.29 昏睡強盗の容疑でタイ女性逮捕される(東京)★
- 12.13 昏睡強盗の容疑でタイ女性逮捕される(東京)★
- 1992 1.16 スナック経営者とタイ人ママが殺される(千葉県)
- 3.15 タイ人ママと内縁の夫が殺される(長野県上田市)
- 3.24 日本人男性殺害の容疑でタイ女性逮捕される(茨城県鹿島郡)
- 4.8 スナック経営者、タイ人ホステス襲われる(茨城県麻生町)
- 5.1 交通事故でタイ女性死亡(茨城県潮来町)
- 5.28 タイ人ホステス同士の殺人事件(大阪)
- 5.21 タイ3女性スナックの経営者(台湾人女性)殺害の容疑で逮捕される(東京新小岩)★
- 6.19 タイ女性知り合いのタイ女性殺害の疑いで逮捕される(横浜)★
- 6.13 強制売春をさせられていた3タイ女性を救出(山梨県)★
- 8.22 昏睡強盗の容疑でタイ女性逮捕される(東京)★
- 10.1 スナックの経営者(シンガポール国籍の女性)が殺される3人のタイ女性が逮捕される。あと2人が指名手配中(千葉県茂原市)★(タイ女性支援基金が支援しています)

最近のタイ女性の事件は、殺人事件だけでなく「昏睡盗」事件も増えています。「昏睡盗」とは、客とホテルへ行った後、酒などに睡眠薬を入れ客が昏睡している間に金を盗むという事件です。「昏睡盗」は大変重い罪であることを彼女たちは認識

していません。警察に捕まってから何年もの実刑を受ける聞いてショックを受けるようです。

そもそも、その睡眠薬は彼女たちも常用しているケースが多いとのこと。被告の一人は、「これを飲むとすべてが忘れられるから」と述べているように、日本の辛い生活や、辛い仕事を忘れるために飲み始めるのでしよう。

このようにタイ女性を様々な犯罪に追いやる人権無視の日本の社会を私たちは根本から変えなければと痛感します。

裁判傍聴記

新宿タイ女性殺人事件

滝島真理子

九一年十月一四日、新宿でタイ女性Bさんが刺されて殺された。殺人罪で逮捕されたのはやはりタイ女性のKさん(二五才)だった。

彼女は、タイ北部のチェンライ出身で七人兄弟の末っ子。小学校を四年で中退し農業を手伝う。両親に榮をさせたいと九〇年五月来日。事件の起きたマンションは3DKで、ここに日本人男性と妻と子供、七人のタイ女性の計九人が住んでいた。夫婦と子供が一部屋、七人のタイ女性は二部屋に分かれ、KさんとBさん

は別部屋だった。女性たちは、一人五、六万円ずつ家賃として毎月夫婦に払っていた。(！)

日頃から、リーダ格のBさんはおとなしいKさんを大声で怒鳴ったり、罵声を浴びせ苛めていた。事件が起きる前日Bさんにかかってきた電話をKさんが取り次がなかったということが原因でBさんの罵声はいつも以上にひどく、Kさんの両親に対する侮辱にまで及ぶ。Kさんは、それには我慢できなかった。KさんはBさんの後を追ってエレベーターに乗り刃物で刺し逃げる。Bさんはその日の夕方死亡。KさんはBさんが死亡したことを聞いて驚き、翌日出頭。殺人、銃刀法違反の疑いで逮捕される。

第一回公判 九二年一月二日

公判はすべて東京地裁で、人定質問、検察側の起訴状朗読、弁護側より証拠についての同意、不同意の意見が出され一時間十分ほどで終了する。そのKさんはほとんど身動きひとつせずハンカチを握りしめ、緊張の面持ちでうつむいていた。

彼女は自ら犯した罪の意識からか、あるいはタイ人の宗教心からか、弁護士とタイ人通訳以外の面会を拒み、権利主張もほとんどせず一人での重さに耐えようとしているかのよう

第二回公判 二月八日

第二回公判は、検事側証人としてKさんと同室だったタイ女性Yさんが尋問を受けた。検事側証人とはいえKさんと同室だったYさんはKさんに同情的な証言が続く。「Kさんの性格は、丁寧な人で多くは喋らない人。いつもにこにこしていて人に悪口をいうようなことはなかった。両親をいつも敬っていた。Bさんの性格は口が悪く自分本位の人」等。

第三回公判 三月四日

弁護人より、被害者が刺された後の見取り図とその写真が証拠として提出される。また、検事側の証人としてBさんを解剖し、鑑定書を作成したT医師が尋問を受ける。Kさんも、検事、弁護人の尋問を受ける。その中でKさんは、「両親に榮をさせたくて日本にきた。東京での生活はTV、水道、ガスと快適だが、両親と離れて寂しかった。タイ料理を食べると心が幸せだった」等、述べる。Kさんが入廷し、被告人席に着席

したとき、傍聴席を見回す。きつとYさんたちがまた来ているのではないかと探したのだろうか。残念なことに今回は来っていない。Kさんと目が合いにっこりする。

第四回公判 三月二五日

検事……殺意の認定 殺人罪 懲役十年求刑

刃より長い傷を負わせている。エレベーター内で一気に刺している。刺した後逃げている。等……情状なし。弁護人……殺意はない。傷害致死罪捜査段階から一貫して殺意を否認している。ただ痛い目に合わせるつもりだけだったと。また、被害者が死亡したことを聞き、驚いて自ら警察に出頭している。Kは仏教心厚く、両親の生活を樂にさせたいとの思いから辛い日本での生活に耐えてきた。本件事件の動機、背景、反省、再犯の可能性のなき、被告人の性格などすべての点を顧み、執行猶予の判決を求め。

すべての審理が終了した。Kさんは弁論がタイの両親のことに及ぶと、何度か涙を拭っていた。最後に裁判官の「何か言いたいことは」との問いにKさんは「特にありません。ありがとうございます」と深々と頭を下げた。

判決 五月一四日

一五ページに続く

被害者としてタイ女性を支援してNさん事件を通して考えること

タイ女性Nさんは一九八八年六月、名古屋市内の店でフィリピン女性を刺してしまい、殺人未遂の容疑で起訴された。このとき彼女は二〇歳だった。一番では、入院加療中に強制送還されるのを恐れ病院から逃走した被害者を含め、六人のフィリピン人の事件関係者は行方不明を理由に、一度も法廷に立つことはなかった。だが、八九年七月一日、名古屋地裁での判決公判では、捜査段階での被害者らの調査と、検察側証人として出廷した事件の起きた店のママR(名古屋のタイ人ブローカー)の証言を重視し、被告人に「殺意があった」と認め、懲役三年(求刑同五年)の実刑判決を下した。

私たち仏教者と「滞日アジア労働者と共に生きる会」(あるすの会)は、拘留所のNさんと面会、手紙などを通じて励ますとともに、裁判を見守ってきた。

八九年一月、私たちは「Nさんの裁判を支援する会」を発足させ、「アジアの私たちの会」をはじめ、たくさんの人たちの支援にも支えられて控訴審に臨んだ。その控訴審で明らかになったことは、警察での取り

六月、Rがママをしていた店で事件に巻き込まれてしまったのだ。

九〇年四月、名古屋高裁で「控訴棄却」の判決を受けたNさんは、栃木刑務所で刑に服し、九一年四月に仮出所した後、強制送還でタイへ帰国した。Nさんが日本にいたのは三年七ヶ月。しかし、そのほとんどを囚われの日々として送ってきた彼女にとつて、いつか日本とはどんな国であったのだろうか。

ところが、Nさんの事件以降も、滞日タイ女性の置かれている状況を象徴するかのような事件があいついで起きている。昨年九月から今年九月の間だけでも、タイ女性が被害者もしくは加害者となる「殺害事件」(被害者が亡くなった事件)が一〇件も起きている。たしかにこれらの事件では、被告となったタイ女性たちには、加害者としての重大な責任があるものの、同時に被害者であるという側面も持ち得ている。なぜなら、事件を起こしてしまった彼女たちこそ、タイ・日本を結ぶ人身売買組織の犠牲者なのだから。タイ女性が日本へ入国してくる背景には、タイ女性を「商品」として扱い、次から次へと転売していくことよって膨大な利益を得ているタイ国内のシンジケート、日本国内の暴力団組織が存在している。

現在、日本には、人身売買組織の犠牲となり、約三五〇〜四〇〇万円という法外な借金を負わされ、暴力団などの監視の下、「売春」を強要させられているタイ女性は、少なくても五万人以上いると思われる。このような状況が続く限り、おそらくタイ女性を巡る事件は起き続けるのではないかと危惧される。

昨年七月、三重県鈴鹿署が保護したタイ女性を暴力団に取り引きの材料として引き渡すという事件が、タイ女性の証言から明らかになった。しかし、今回の事件でも、人身売買組織に対する追及はまったくなされなかった。さらに、買春する日本男性の問題も不問に終わった。また、人権無視のこのような公的機関の行為、アジアの労働者、ことにアジアの女性に対する蔑視のあらわれであり、人としての扱いを全く無視した人権意識の低さをあらわしている。だが同時に、タイ女性を「商品」として「輸入」することを許している私たち日本人の責任こそ重大ではないだろうか。さらには、タイ女性の「性」を求め、群がる日本男性こそ問われねばなるまい。

仏教者国際連帯会議・日本会議
杉浦 明道

殺されるアジア女性たち

タイ女性の涙

三浦孝人

早期より空はどんよりと曇り、今にも涙雨が降りそうな気配であった。二月二日午前九時半に宇都宮駅で、アジアの問題を考へる会のスジンダ・泉田さんと待ち合わせをして斎場に向かった。スジンダさんは栃木県内で起きたアジアの人たちの事件を一身に引き受けて活躍をされてい

一九九一年一月二六日午後三時五分ごろ宇都宮市内のホテルのベッドの上で、タイ女性チラーボン・ナントシャードさん(30)が殺されているのが発見された。

その事件が報道された二八日早朝、宇都宮東署で事件のあらましを聞いた。「チラーボンさんは日本人男性と二人でタクシーに乗ってホテルにチェックインしたが、男性だけがチェックアウトしたので、不審に思ったホテル従業員が部屋を見に行ったら殺されていた。従業員とタクシー運転手の証言でY(42)が犯人として全国に指名手配した」

市街の小高い丘にある斎場には既に、チラーボンさんの友達タイ女性五人・宇都宮市役所福祉課の係の方三人・そしてA住職夫妻が待つて居られた。A住職はタイ国バンコクの寺院で修業されたことがあり、タイ語もお上手だった。

パチンコ店員などして各地を転々としていたYは、所持金がなくなっていて、買春代の支払いをめぐってトラブルを起こし、チラーボンさんを殺した、と見られた。

二月二日、東署に電話すると、「遺体は市役所に安置してあるが、タイの家族は経済的理由で引取りに来日できないので、知人のタイ女性(チラーボンさんがこの女性を頼って来日)を引取人にして火葬にしてほしいと依頼してきた。タイ大使館の許可手続きに数日かかる」といわれた。一二日午前十一時から市内の宇都宮斎場で行なわれた火葬・葬儀に参列した。

祭壇には遺影・タイ語で書かれた位牌・タイの仏像・タイ国旗・生花が飾られた。

十時三十分にはチラーボンさんの遺体が、今朝まで安置されていた独協医科大学より静かに運ばれ、祭壇の中央に置かれた。

A住職の厳かな読経と、参列者の焼香が滞りなく終わると、棺の蓋を開け、チラーボンさんの顔の周辺に生花を飾って差し上げた。そして、参列者は悲しみと涙の中、別れを惜しみながら棺の蓋に釘を打ちつけた。棺を火葬炉の前に運び、再びA住職の読経のなか、お別れをした。チラーボンさんとの最後のお別れは小さな窓からであった。美しい顔で両目を大きく開け、年齢よりは若く見えたが、どこかもの悲しそうで我々の涙をさそった。

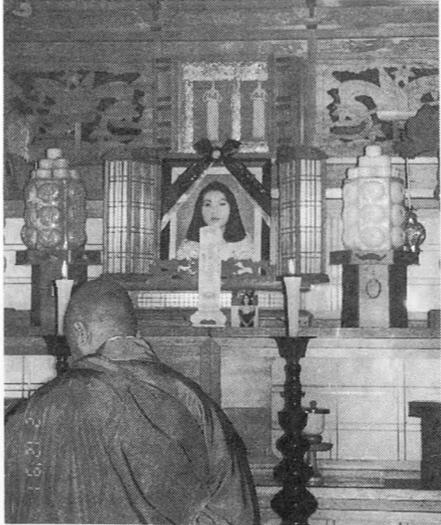
代わる代わるにお別れを惜しんでいたとき、チラーボンさんの両目から涙がひとすじ、ふたすじと流れ落ちた。それはもう、びっくりするような光景で、みんな驚愕のあまりにその場に立ちすくんでしまった。彼女の涙は、いったい誰に何を、訴えようとしたのであろうか。

チラーボンさんは、タイ北部のパヤオから九〇年二月二六日、一五日間の短期滞在ビザで成田空港から入国し、宇都宮市郊外の二階建てのアパートに直行した。部屋には同じタイ人の女性が住んでおり、同居しながらこの女性が働いていた同市内のクラブに、直ぐ通うようになった。

彼女は店では源氏名「ジュンコ」と名乗り、Yともこの店で知り合った。事件前夜の一月二五日から行動を共にし、当日の二六日午前、二人は市内のパチンコ店で遊んだ。

「いま、ココロ・ヒューヒューにいるヨ」とアパートのタイ女性に、心配をかけたくなかったのか、パチンコ店にいることを電話した。これが彼女の最後の言葉となった。

チラーボンさんが残した手帳に、来日してから殺されるまでの約一カ



チラーボンさんの遺影が飾られた葬儀場。宇都宮市内で

月間に、日本人男性とデートした日付と金額が記帳されていた。彼女のメモによると百万円位の稼ぎがあった。しかし、彼女の所持金は一万円で、タイの田舎の実家に送金した様子もなく、また銀行にも預金はなかった。多分、彼女のボスに借金の返済として稼ぎの全額を取り上げられていたのだろう。

宇都宮斎場でのお葬式と火葬の全ての費用は、宇都宮市役所が負担された。また、チラーボンさんの遺骨を後日、タイ大使館まで届けていたのだ。

A住職はお葬式等一切を厳かに執り行つてくださり、また貴重な時間を提供された。

あるフィリピン女性の葬送

紀子さんの結婚式が華やかに祝われていた六月二九日の朝、私は喪服姿で東京・六本木のカトリック教会にいた。祭壇の前のひつぎには一〇日前に同棲していた暴力団員に殴り殺されたフィリピン女性マリベル・マラタさん(20)の遺体が収められていた。マニラからやつとかけつけた三六歳の母親は三年ぶりに再会したわが子の変わり果てた姿にただ涙を流していた。

やはり黒ずくめの若いフィリピン

スジンダ・泉田さんには事件発生後タイ語の通訳等で奔走していただいた。

皆さんの優しく、あたたかい、小さな善意で、チラーボンさんのお葬式を無事に終えたことは、私の人生のなかで、一生忘れられることのないものとなった。

チラーボンさんが流した涙を思い浮かべながら、帰りの列車に乗り込んだ。

タイ国の最近の経済発展はめざましいものがあり、タイ国通貨バーツは近隣諸国をバーツ圏に取り込んでしまった。

一方、首都バンコクと地方農村の賃金格差は広がるばかりである。特

に北タイ・東北タイ(イサーン)は現金収入が少なく、いきおい若い女性は大家族の家計を助けるため、弟妹の学資を得るために黄金の国ジパング目指して来日する。それも本人の覚悟のない三、四百万円の借金を背負ってである。

チラーボンさんの流した涙は、北タイ・東北タイから来日し、助けを求めている同胞女性たちの声なき声かも知れない。

今日も悲しい思いで東京拘置所に足を運び、タイ女性に面会を求めました。少しでも彼女たちの心のより所になればと。チラーボンさんの涙を無駄にしないためにも。

あまりにも対照的であった。

マリベルさんは父親が亡くなった翌年一七歳のとき友人に誘われて来日した。そのときの偽造パスポートの氏名、年齢が骨壺に記されたのである。彼女は愛くるしい少女で何カ所かのクラブやスナックを転々とした。最初のうちは、弟妹を学校にやりたいために送金していたという。

しかしヤクザとのつながりができ、二カ月ほど前から同棲していた背中いっぱい入れ墨の男に殺されてしまったのだ。「彼女はわがままのところがあったけど、やつぱり寂しいので



マリベルさんの棺に最後の別れを次げる母親と友人たち。東京・六本木で

リトル・バンコク訪問記

茨城県、長野県のタイ人ホステスの町を歩けば……

花嫁かホステスか

タイ女性記者の取材に同行

「日本へのタイ人花嫁斡旋について取材したい」と九一年一月、タイの英字紙『バンコク・ポスト』の女性記者ヌサラさんが突然来日した。バンコクの歓楽街パッポンの近くに「プライダル・センター」という日本人経営の結婚斡旋所が店開きして「可愛いお嫁さんをご紹介します」という広告が出たと聞いたことがきっかけという。何とか、埼玉県のタイ女性専門の国際結婚業者と連絡がつい



スナックの看板がズラリと並ぶ茨城県内の「リトル・バンコク」

て、十人ほどのタイ人花嫁さんと接触したヌサラさんは「お金がからんでいるのは問題だけど、単純にいい悪いを判断できない根の深いものを感じた」という。

ある花嫁さんは取材されることを迷惑ががりながら次のように話したという。

「タイで貧しい家に生まれた私のような者がタイにいたって一体どんな人生を送る希望があったのか。問題をかかえる日本の農民とやはり別の問題を持つタイ人の私とが何とか生活を共にしようとして賭けているのだ。夫は容貌も醜く年もとっているが、素朴ないい人で、昼間は懸命に働き、夜は家庭で色々面倒みてくれる。家庭を顧みないタイの農民に比べればずっといい。これも私の運命です」

中には「売春よりはましだから結婚した」というタイ女性もいたという。そこで、ヌサラさんは性産業で働くタイ女性の実情も知りたいというので、茨城県の「リトル・バンコク」を一緒にまわった。

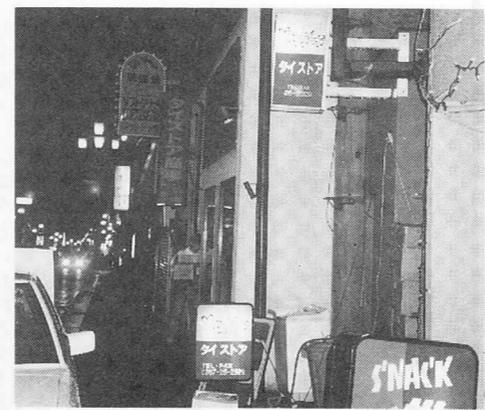
「リトル・バンコク」の町

タイ産品店三軒、タイ食堂五軒

初めに、週刊誌がかつて取り上げたことで、タイ女性たちが強制送還されたという土浦郊外の町へ向かった。西部劇の町のような荒涼とした感じで、県道に面して二棟の二階建て雑居ビルがあった。その中に合わせて二〇軒以上のスナックが入っているが、昼間だったので閑散としていた。近くに「クルンテープ」(天使の町という意味でタイ人はバンコクのことをこう呼ぶ)というタイ産品の店があったので中へ入ると、若いタイ女性たちが食品や日用品の買い物に来ていた。

ヌサラさんがタイ語で話しかけると、北部のチェンマイから来てまだ一カ月の少女もいた。しかし、くわしい話を聞こうとすると、レジにすわっていた日本人男性がタイ語がわかるらしく、こわい顔でにらんだ。店内の写真も「ノー」といわれたが、貼ってあったタイの超人気歌手の大きな写真の前でならいいということになった。

店の外から写真を撮ろうとすると、大きな車がとまっていて、中で女性たちを待っていた業者らしい男がけわしい表情をした。女性たちを引率してきて逃げないように監視してい

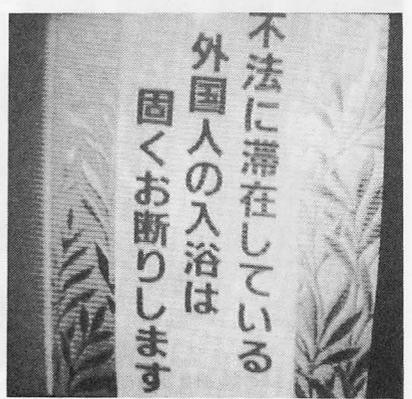


タイスターやスナックが目立つ小諸市内

どと案内してくれた支援ボランティアが指す。何しろ人口四万四千人の町なのに百軒近い店に千人ものタイ女性がいるというのだから驚く。

夜の歓楽街を歩くと、「リトル・バンコク」とかタイにゆかりの名前が目につく。「不法滞在外国人の入浴お断り」といった看板が出ていたりする。スナックの一軒に入ると、経営者は六〇代の日本男性でまだ二〇代のタイ女性を妻にしてママさんとして店をきりもりさせていた。数人のタイ女性をかかえ、この夫婦の近くに住ませ、ママさんが監視、コントロールしている、典型的な人身売買スナックだ。買春目的でこの町には東京あたりからもバスを連ねてやって来るという。

このママさんの目を盗んで会員が



不法に滞在している外国人の入浴は固くお断りします

駅近くのスーパーに立ち寄ると、フィリピン女性の姿はあったが、タイ女性ほとんど見かけず、タイ女性の方がより厳しい人身売買組織の中に組み込まれて外出の自由もなく拘束されているのではないかと思われるのだ。

ヌサラさんはどうしてもタイ女性に直接取材したいというので、霞が浦の向う側の鹿島コンビナートのある町へ行った。ここは、まだ「リトル・バンコク」としては知られていないが、タイ女性の数がうなぎ上りというのだ。夕方、この町に着くと、予想以上の実態になっていた。タイ食品店が二軒に、タイ衣料品店まであり、タイ料理店は五軒も開いていた。人口はほんの四万人余のこの町に数百人のタイ女性という集中ぶりなのだ。

タイ人姉弟が経営しているタイ食堂で夕食をとって七時頃外へ出ると、

タイ語で話しかけると、ホステスたちは話に乗って来た。「二百万円の借金を言い渡されているので、毎日何人も客をとられるのに、一銭も払ってもらえない。本当に悔しい」と娘を置いて出稼ぎに来た年かきの女性が声をひそめたという。こういう状況の中で、タイ女性たちがママさんを殺して逃げるという最近頻発している事件がここで起こっても不思議ではない光景だった。

翌日、この町に住み着いた学者から話を聞いたら、「タイ女性がここ数年急増したのは暴力団が他地区から移動してきたためだ。人口一人当たりの暴力団員の数は恐らくこの町が一番多いのではないか。売春を強制されてはだして逃げ出したタイ女性もいる。人身売買は暴力団の重要な資金源だからほびこるのだ」という。暴力団が堂々とこうした商売ができるのは、警察との癒着があるからという声も耳にした。

* *

茨城県も長野県もリトル・バンコクをかかえて、エイズ感染者数が多いことも知られている。

(松井より)



客が来てちよつと飲んで、カラオケを歌ったと思ったら女性と出て行く。いつものまにか、店内の女性は二、三人だけになっていた。

こうして一見日常的で平穏な買春風景だが、その裏では女性たちが少

千曲川旅情の町にタイ女性千人

長野県の「リトル・バンコク」として知られる古城の町をタイ在住のアジアの女たちの会の会員たちと九二年五月に探訪した。雨の中、町をまわると「あのアパートにもタイ女性がいる」「ここもタイ女性が多い」な

しても反抗すれば暴力的な制裁を受け、危険にさらされている。この町でタイ人男性と同棲して、東京まで出て客をとっていたタイ女性が新宿区大久保のラブホテルで殺される事件もあった。

こうした危険を知らずに、あるいは知っていても自分だけは大丈夫と信じて日本に来るタイ女性たち：ヌサラさんはタイ側の背景をこんな風に分析した。

「一つはタイでの男女不平等のために女性がなかなか仕事を得られないことや、処女崇拜が今も強く、男女関係で挫折すると自分はどうだめだと思ってしまうこと。二つ目は、農村開発の失敗による貧困。三つ目は物質主義的な価値観がはびこり、金、家、車、家電製品などで人間を評価し、そのような宣伝攻勢にさらされること。そしてもう一つは、タイ社会での買春容認の伝統で、女性をかうことをなんとも思わない意識があることです」

タイのエイズ—買春で蔓延

タイではエイズの爆発的感染が社会問題になっている。八四年に初めて患者が確認されたが、八七—八八年から急増して現在は感染者は三、四〇万人と推定され、今世紀末には三百万人にもなる見通しだ。

タイのエイズ感染は北部を中心に始まり、主要な感染経路は買春で、とくに、買春宿の少女たちが犠牲になっている。チェンマイ大学の調査では、買春料金五〇バーツ（一五〇円）以下の女性は七〇%以上、百バーツ以下の女性は三〇%以上、百バーツ以上の女性は一六・七%が感染していた。「男の子は十三歳ぐらいから買春を始め、十六歳では五〇%、大学生の九〇%が売春婦を買うというタイ男性の性行動を変えない限りエイズ蔓延はくい止められない」と調査したチェンマイ大学医学部教授は述べた。

少女売春婦の中には国境地帯の山岳民族の少女も多く、さらに、ミャンマーやラオスや中国雲南省からも若い少女がタイ北部に送り込まれ、彼女たちもエイズに感染している。バンコク近郊の買春宿の手入れで救出された百人ぐらいの少女のうち二〇%がミャンマーの少女で、そのうち一九人までが感染者だった。

このように買春を通じて、若い男性から中年の夫までエイズに犯され、さらに妻や恋人に感染し、生まれた子どもにまで母子感染する。タイではすでに妊産婦の一%、約一万人が感染しており、生まれる赤ちゃんの約三〇%三千人がエイズベビーなのだ。残りの七千人はやがてエイズ孤児になる運命である。

合計	879
東京都	320
茨城県	112
長野県	59
神奈川県	52
千葉県	49
大阪府	38
埼玉県	33
愛知県	29
栃木県	18
東京都	16
山梨県	15
静岡県	12
北海道	10
三重県	"
兵庫県	"
福岡県	"

1992年9月厚生省発表



日本の「買春容認」のエイズ防止ポスター

染者患者は過去最高の百人で、そのうち、七〇人が外国人（男性九人、女性六一人）だった。外国人女性のうち五〇人が東南アジアからで、ほとんどがタイ女性とみられる。地域別に見ると、別表の通り、これまでの感染者、患者総計八七九人のうち東京が三分の二以上を占めているが、リトル・バンコクといわれるタイ人集中地区のある茨城、長野両県がそれに続いている。

今、何より必要なことはエイズの犠牲になったタイ女性に対する差別反対キャンペーンと、彼女たちが最善の医療などのケアを受けられるようにすること、そして、根本的には、タイの女性解放グループが「女性を買うな、売るな（人身売買するな）」と要求しているように、買春をやめさせることだと思ふ。（松井やより）

下館事件 実名報道 に 抗議

下館事件の第一回公判の直前に、弁護団が仮名報道の緊急要望書（以下掲載）を茨城県司法記者クラブと報道各社宛に申し入れたにも拘らず、朝日新聞とサンケイ新聞の記事は被告の一人が実名で出ていたので、今後そのようなことのないよう配慮をお願いする旨の電話をしました。

「本日午後一時三〇分水戸地方裁判所下妻支部において第一回公判期日が開かれる予定の、タイ女性三名を被告とする強盗殺人被告事件についての報道につきましては、被告人らの実名を明記した報道をされないよう厳重に申しれます。

その仕組みないしルートを逸脱した者として追跡ないし報復の対象となっており、したがって、日本において被告人らの実名が報道され、タイにその情報が流れるようなことがあれば、釈放後の被告人らはもとより、その家族にたいしても、生命、身体などに対する危害が与えられる可能性が高いものです。（以下省略）



タイ女性殺害初公判

茨城県下館市で九月下旬、タイ人ホステス三人がアパートに同居してい

た「ボス役」のタイ人女性を殺害し、金や貴金属を奪って逃げたとして、強盗殺人罪に問われた。初公判が十八日、水戸地裁下妻支部（市川頼明裁判長）で開かれた。弁護側は「強盗殺人ではなく、殺人と窃盗しかも殺人は正当防衛」と主張、真つ向から争う構

「強盗殺人」か「正当防衛」か
背景に劣悪な境遇も

「ボス役」のタイ人女性を殺害し、金や貴金属を奪って逃げたとして、強盗殺人罪に問われた。初公判が十八日、水戸地裁下妻支部（市川頼明裁判長）で開かれた。弁護側は「強盗殺人ではなく、殺人と窃盗しかも殺人は正当防衛」と主張、真つ向から争う構

1991. 12. 19付 朝日新聞
■ 部分に実名が記されている

アジア女性 支援団体リスト

支援の必要な女性に出会ったら
下記のグループにご連絡下さい。

- 札幌**.....
在日外国人の人権を守る会・北海道(SPR)
☎011-552-5579
- つくば**.....
下館事件タイ3女性を支える会
☎0298-55-5743
- 宇都宮**.....
TILL(栃木インターナショナルライフライン)
☎0286-24-2546
- 桐生**.....
フレンズ
☎0277-45-0660
- 東京**.....
ラフル(外国人労働者弁護団)
☎03-3357-8855
女性の家 HELP
☎03-3368-8855
ぐるーぷ赤かぶ
☎03-3940-6359
アジア人労働者問題懇談会
☎03-3816-0161
- 千葉**.....
Hand-in-hand ちば
☎0472-24-2154
- 横浜**.....
カラバオの会
☎045-662-5699
女性の家「サーラー」
☎045-901-3527
女のスペースみずら
☎045-451-3776
- 長野**.....
アジアの花嫁を考える会・ながの
☎0268-33-7119
- 静岡**.....
へるすの会
☎053-434-2660
- 名古屋**.....
あるすの会
☎052-935-9448
- 京都**.....
APT(アパート)
☎075-431-0351
- 大阪**.....
アジアフレンド
☎06-634-2127
- 福岡**.....
アジアと共に生きる会・福岡
☎092-751-8222
- 熊本**.....
滞日アジア女性問題を考える会
☎096-352-3030

PART II

タイで起こっていること……

日本の性産業でタイ女性がふえ始めた八〇年代後半は実はタイの経済がめざましい発展を遂げた時期でしただ。GNP成長率はなんと一〇%を超えて新興工業国の仲間入りも間近だと「成長のアジア」のシンボルのように世界から注目されています。それなのに、なぜタイ女性たちは人身売買の形で日本や西欧など海外へ出なければならぬのでしょうか。

バンコク中心の繁栄

私が初めてタイを訪れた七〇年代半ばの首都バンコクは食べ物屋の屋台が張り出した通りを「空車」などというメーターをつけたままのボロボロの日本製中古車のタクシーが走り、その間を縫ってはだしの子どもが物売りをしたり、オレンジ色の袈裟をまとった老若の坊さんたちがのんびり托鉢しているような貧しげな町でした。しかし、最近のバンコクの中心部は高層ビルのジョッピングセンターやコンドミニアムやホテル

「日本がタイを丸焼きにする」

企業進出とODA

松井 やより

が林立し、ピカピカの新车やバスなど車の洪水で交通はマヒ、携帯電話片手のビジネスマンが忙しげに行き交うといった近代的大都会に変貌し、タイの繁栄を象徴しているかのよう活気に溢れています。夜はパッポンをはじめ歓楽街は不夜城のように外国人観光客でにぎわっています。

ところが、一方でクロントイなどスラムが広がってバンコクのもう一つの顔を見せています。八百万人ともいわれるバンコク市民の四人に一人はスラム住まいとか。それは農村の窮乏化のあらわれで、バンコクを離れて、東北部イサーンや北部国境地帯の村を歩くと、貧困を見ます。

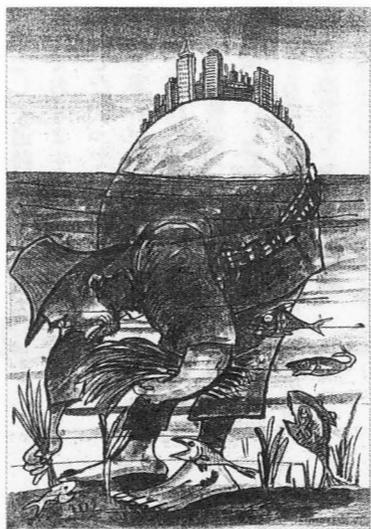
農村の収入は都市の十分の一

統計的に見ても、タイの経済発展は首都バンコク中心で、最近が開発の波が北部の古都チェンマイなど地方にも押し寄せているとはいえ、バンコクと東北部や北部農村との所得格差は一〇倍もの開きがあるのです。

バンコク・ポストという英字新聞の女性記者サニスタグ・エカチャイさんが書いた『微笑の陰で』(会員が翻訳、明石書店から出版)は、繁栄から取り残された農村の人々の苦悩をタイ女性の視点でなまなましく伝えていきます。

私自身何度もタイを訪問してその現実を見ました。北部タイは伝統的に、性産業に働く女性の供給地でした。チェンマイ美人などといわれたり、山岳民族も多く、女性の容姿が美しい、つまり商品価値があるというところ、社会的に売買春に対する抵抗が少ないこと、などが理由ですが、根底には経済的な窮乏があるのです。

九〇年、チェンマイでの「アジアの観光と児童買春」という国際会議の現地見学で訪れた村では、若い女性が出払って、二人しか残っていませんでした。ゴルフ場に農地を買い叩かれたという村を訪ねると、百人以上の若い娘さんが都会のネオン街に出て行き、三人は日本へ出稼ぎに行

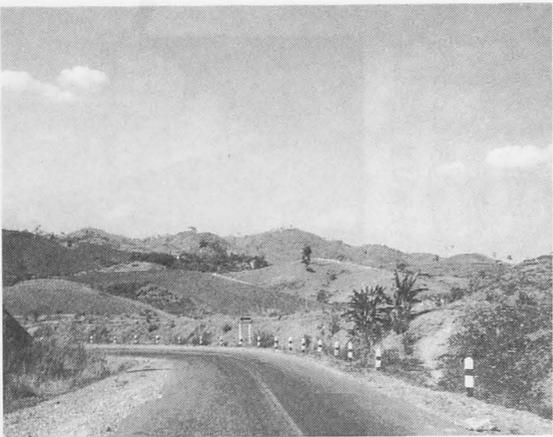


バンコクの繁栄を求めて苦しむ農民の状況を諷刺したマンガ「タイ・ネーション」紙

イサーンの若い女性たちは性産業よりもお手伝いさんや零細工場や商店に働きに出たのですが、最近、バンコクだけでなく、パタヤなどの観光地でもイサーンの女性によく出会います。根本原因は農民たちが一層窮乏化したからです。

イサーンに足を踏み入れると、見渡す限り真茶色の乾き切った荒涼たる光景に衝撃を受けます。かつては熱帯林におおわれていたこの地域は六〇年代から森林が半減してわずか一四%しか残っていないのです。タイは木材輸出が主要な外貨収入源だったのに、八〇年代からは輸入に転じたのです。なぜ、それほどの森林破壊が起こったのでしょうか。

もちろん人口がふえて農地を拡大しなければならなかったことも原因



森林が破壊されて一面ハゲ山のタイ東北部

ですが、どのような農作物を植えるか、タイ政府は輸出用の換金作物を奨励する農業政策をとったのです。それで、農民たちは、とうもろこしやタバコや綿花やタバコなどを植えるようになるようになりました。そのような農作物はプランテーションのように大規模に栽培する必要があります。すし、また地力を低下させるので、森林をどんどん切り開かなければならなくなりました。

また農業機械や化学肥料や農薬を必要としますが、農民はもともと現金を持っていないので有力者に借金をします。ところが、一次産品の国際価格が下がっているため、収穫しても安くしか売れず、借金を返せないわけです。イサーンの農民の七割が借金を背負っているといわれます。そのために、借金を少しでも減らすと娘をバンコクや遠い外国の歓楽街に「売る」しかない状況に追い込まれているのです。

消費文化の浸透も原因

貧困と共にもう一つ無視できないのは、消費文化の急激な浸透で、モノ、カネへの欲求が刺激されることです。しかも、消費財、電気製品などが圧倒的にメイド・イン・ジャパで、朝のめざまし時計やラジオやトースターから一日中日本製品に囲

まれたタイ人の暮らしを風刺した「メイド・イン・ジャパン」がヒットしているのです。「ニッポン・ボンニチ」というヒットソングは、「日本がタイの森も畑も海も奪い、タイを丸焼きにしてしまおう」という内容で、ジャケッとは皿にのったタイの形の刺身をハシでつまむ絵なのです。

日本企業千社が進出

ここで、農民たちが娘たちを売らなければならぬような不平等を生むタイの経済開発に日本がどれほど深く関わっているかが問われています。八〇年代後半はタイブームといわれるほどの日本企業の進出、投資ラッシュで、経済成長を加速しました。さきにふれた農業部門でいえば、とうもろこしなども日本に輸出され、ピフテキやスキヤキ、とんかつなどをエンジョイするために牛や豚のエサになるのです。まさに、日本人のグルメのためにタイの森林が消えていくのです。

日本企業はさらに積極的に野菜栽培を奨励しています。イサーンのあるホテルで会った日本人ビジネスマンは「アスパラガスとベビーコーンを作らせている」といっていました。また、タマネギやショウウガなどさまざまな野菜を開発輸入しています。「タイの畑は日本人のために使われる」

といった嘆きも聞こえて来ます。

海岸地帯へ出れば、広大なマングローブ林が切り払われてえびの養殖池に変わっています。これも日本への輸出向けです。また、日本の十分の一というタイの低賃金を利用して、食品加工をさせています。ヤキトリの串刺しから魚の開きの小骨とりまで、若い女性たちが懸命に働いています。人間用だけでなくペットフード缶も製造していて、日本が輸入するネコ缶の九七%はタイからです。

土地も買い占め

日本の工場は各地にできて味の素からかつら、スキーまで、ありとあらゆるものを作っています。また、日本の商社や不動産会社が土地を(タイ人名義で)買い占めており、チェンマイの繁華街には日本の不動産会社が堂々と店を構え、英字新聞などに「土地購入の相談受けます」などと大きな広告を載せているのです。

とくに「観光立国」政策を進めるタイ政府のもとでリゾート開発にも乗り出し、ゴルフ場も各地でふえています。「現在六〇のゴルフ場があるが数年後には三百にふえるだろう。その六〇%は一級の農地に残り四〇%は水源地帯や自然保有林に作られる。プレーヤーの半分近くは安い会員権を求める日本人が占める」とゴ

「開発」に揺れる女たちの暮らし

タイ・スタディツアー報告 女性・人権・開発グループ

今年8月に女性・人権・開発グループ(WHID)のメンバー4人がタイを訪れた。WHIDでは日本のODAがタイの女性にどのような影響を与えているかを調査したいと考えており、今回のツアーはその第一歩として、巨大開発プロジェクト

として悪名高い東部臨海開発地域と出稼ぎ女性を多く送り出している北部の農村を訪問し、それらの地域で生活している女性やその地域に根づいて活動しているNGOの人々の声を聞いてきた。

今年8月に女性・人権・開発グループ(WHID)のメンバー4人がタイを訪れた。WHIDでは日本のODAがタイの女性にどのような影響を与えているかを調査したいと考えており、今回のツアーはその第一歩として、巨大開発プロジェクトとして悪名高い東部臨海開発地域と出稼ぎ女性を多く送り出している北部の農村を訪問し、それらの地域で生活している女性やその地域に根づいて活動しているNGOの人々の声を聞いてきた。

今年8月に女性・人権・開発グループ(WHID)のメンバー4人がタイを訪れた。WHIDでは日本のODAがタイの女性にどのような影響を与えているかを調査したいと考えており、今回のツアーはその第一歩として、巨大開発プロジェクトとして悪名高い東部臨海開発地域と出稼ぎ女性を多く送り出している北部の農村を訪問し、それらの地域で生活している女性やその地域に根づいて活動しているNGOの人々の声を聞いてきた。

今年8月に女性・人権・開発グループ(WHID)のメンバー4人がタイを訪れた。WHIDでは日本のODAがタイの女性にどのような影響を与えているかを調査したいと考えており、今回のツアーはその第一歩として、巨大開発プロジェクトとして悪名高い東部臨海開発地域と出稼ぎ女性を多く送り出している北部の農村を訪問し、それらの地域で生活している女性やその地域に根づいて活動しているNGOの人々の声を聞いてきた。

今年8月に女性・人権・開発グループ(WHID)のメンバー4人がタイを訪れた。WHIDでは日本のODAがタイの女性にどのような影響を与えているかを調査したいと考えており、今回のツアーはその第一歩として、巨大開発プロジェクトとして悪名高い東部臨海開発地域と出稼ぎ女性を多く送り出している北部の農村を訪問し、それらの地域で生活している女性やその地域に根づいて活動しているNGOの人々の声を聞いてきた。

今年8月に女性・人権・開発グループ(WHID)のメンバー4人がタイを訪れた。WHIDでは日本のODAがタイの女性にどのような影響を与えているかを調査したいと考えており、今回のツアーはその第一歩として、巨大開発プロジェクトとして悪名高い東部臨海開発地域と出稼ぎ女性を多く送り出している北部の農村を訪問し、それらの地域で生活している女性やその地域に根づいて活動しているNGOの人々の声を聞いてきた。

今年8月に女性・人権・開発グループ(WHID)のメンバー4人がタイを訪れた。WHIDでは日本のODAがタイの女性にどのような影響を与えているかを調査したいと考えており、今回のツアーはその第一歩として、巨大開発プロジェクトとして悪名高い東部臨海開発地域と出稼ぎ女性を多く送り出している北部の農村を訪問し、それらの地域で生活している女性やその地域に根づいて活動しているNGOの人々の声を聞いてきた。

ODAで観光道路

日本のODAは金額では世界一になったが、タイは四二億ドル(九〇年)を供与され、インドネシア、中国、フィリピンにつぐ四大受け取り国の一つです。しかし、そのODAの大部分が道路、港湾、空港、橋、ダム、工場団地などの大規模なインフラ作りに使われて、農業や教育福祉などのBHN(人間が生きていくのに最低必要なもの)にはまわらないの



タイ北部の山岳民族ラフ族の一家
—チェンライで

です。今タイが重工業化をめざして国策として建設している東部臨海開発は日本の鹿島コンビナートをモデルにしており、その近くの漁村が立ち退きを迫られていることは、次のレポートにある通りです。
タイ北部のゴールデン・トライ・アングル(黄金の三角地帯)はかつて麻薬の産地として知られていましたが、最近では観光開発の波が押し寄せ、豪華なホテルが建設されて世界各国から観光客を引き寄せています。チェンライ新空港もこの地帯に近いところに完成しました。次は、北端のミャンマーとの国境の町メーサイからここまでの道路四四キロを整備しようと、そのために日本のODAがつぎ込まれているのです。

だれのための援助?

ラフ族の村にはまだ学校さえなかったし、タイ農民の村には小学校があってもまるで揺立て小屋同然で、先生たちがどうしたら女の子たちが買春

つねに日本の影

タイ北部のビルマ国境に近い、山に囲まれた小さな町メーホーンソンでは、毎年、北部の山岳民族の女性のみを出場者とする美人コンテストが開かれるという。タイでは、美人コンテストが盛んであり、娯楽のひとつになっていくともいえる。大きなコンテストはマスコミで華々しく報道される。

バンコクから六〇〇km、チェンマイ盆地から北東地方に直線距離にして一〇〇km、県都バヤオのまわりに広がる低い山地に六〇余りの村が山をぬう道路にそって散在するドッカムタイ郡の村の学校(中等教育)を訪ねた。北部の女性は美しいといわれるが、とりわけドッカムタイ郡は美人が多いとされている。学校の先生との懇談の時に、美人コンテストのことをたずねると、祭りの際に催されるコンテストでブローカーが品定めをし、リクルートしていくという。

宿に売られないようにできるか頭を悩ませているのでした。このような住民の窮状はそのままにして、外国の観光客の楽しみのための道路建設にODAを使うことに、どうしても納得がいかないのです。JICA(国際協力事業団)は、タイ観光推進政策に協力して、観光マスタープラン作りまでしています。

タイは大きく中部、北部、東北部、南部の四つの地域に分けることができる。中部は政治的にも経済的にも国の中心であり、特にバンコク首都圏に一極集中している。北部と東北部はタイの中でも貧しい地方であり、世界銀行の調査によると、貧困ライン以下の生活をしている人々の約半数が東北部に、約三分の一が北部に住んでいるとのことだ。

その報告の中でタイ南部の観光開発が重視されていますが、その中心であるブーケット島を訪ねると、大変な観光ブームでした。島のビーチは北西部をのぞいてほとんど観光地として開発し尽くされ、島の人々の立ち入り禁止や環境破壊、売買春が問題になっていっています。シージブシーと呼ばれる先住民の村は、観光

開発のために追い立てられようとしており、「代々住んでいるこの土地を奪われなければならないのか」と怒りをぶつけた八〇歳の老漁夫の日焼けした顔を忘れられませんか。
タイの外貨獲得源としてトップの観光産業にタイ政府が力をいれ、全世界から年間五百万人もの観光客が殺到している一方で、タイの人々がどれだけ被害を受け、環境が壊されているか……。

タイブームといわれるほど最近ではタイ好きの日本人がふえています。日本とタイの不公平な関係が女性の人権侵害を引き起こしていることを肝に命じて、それを変えるために何ができるかを考えたいものです。

タイブームといわれるほど最近ではタイ好きの日本人がふえています。日本とタイの不公平な関係が女性の人権侵害を引き起こしていることを肝に命じて、それを変えるために何ができるかを考えたいものです。



質素な校舎でも元気づけたいタイの小学生たち—チェンマイで

思いとどませようと説得する先生。その間に割りこむブローカーの影。学校を訪ねた次の日、チェンマイ国際空港で絵葉書を買った。観光名所や山岳民族の装束の絵葉書に混じって「メーホーンソンの美人コンテスト」の葉書があったのだ。前日、農村で地道な活動を続けるFARMのスタッフや先生の話聞いたばかりだった。その次の日、何もかもきれいで都会的な国際空港で見たのは、山岳民族の女性のエキゾチックな美しさを売り物にした華やかなショーの写真。裏の説明書きには「右端の紫の衣装の女性はカレン族……それ以降は順にラフ族、カレン族、リス族、ルア族、モン族……」と書かれており、まるで品評会。観光に女性の商品化が抱き合わされている実態を華やかに描くところなるというモデルケースだ。

一九八〇年代後半、タイはめざましい経済成長をとげた。八九年、九〇年、九一年のGDP(国内総生産)成長率は二桁に達し、NIES(新興工業地域)、ASEAN(東南アジア諸国連合)の中でも最も高く、近いうちもある。しかし、この急激な高度成長は、国内において、さまざまなひずみをもたらしている。

そのひとつにあげられるのが、国内の地域格差と貧富の格差の拡大だ。

様子をつぶさに見た。

東部や北部で見聞きした現状の影には常に「日本」があった。「開発」とは農村や漁村の人々を踏みしめるのではなく、自立した豊かな生活をもたらすものはずである。わたしたちは日本人として何をしたいのか。タイを訪れて出会った農村や漁村の人々の一人一人の顔を思い浮かべながら、彼らからのメッセージをしっかりと受けとめたいと思っている。さて、前置きはこれくらいにして訪問先であるレムチャバン、ドックムタイ、ヤオ族の村について詳しく報告したい。(高井 尚子)

ODAに揺れる レムチャバン村の人々

バンコクから東南方向に約一三〇キロ、タイ湾に臨むレムチャバン村は古くから漁業で栄えてきた。岬から眺めると赤や青の漁船の群れが、午後の陽光の射す沖へ出て行くのが



漁船が見えるレムチャバンの海

の両側には時々集落が姿を見せる。土の色は、まるで流れ続けた血が乾いた後のように、はつと息をのむほどに赤い。すっかり田植えが終わって若い苗が綺麗に並んだ姿を見せているはずのたんぼは、雨季だということにさっぱり雨が降らないため、干涸びた土肌をさらしている。灌漑の設備はまったく不十分で、農業用水は雨まかせ。でも、どんな小さな家にもテレビアンテナが立ち、これでもかこれでもかと消費をおおる情報は確実に人々に届いていることを教える。電気だって水だって、十分に越したことはないかもしれない。でも生まれて育った土地で自然な営みの中で生活することさえ選べないとしたら。手入れの行き届いた気持ちの良い学校に到着。生徒達は体育館でミーティングの最中。「幸せなら手を叩こう」の歌が聞こえてくる。別のグループは校庭でミニメントの製作に取り組んでいる。

忙しい時間を割いて、FARMの女性と共に社会科の女性教員のムック先生と、校長先生が私たちに話して下さる。初め校長先生はかなりうさんくさげだった。と言うのも日本のマスコミなどの取材によって、この辺りがまるで人身売買の村のようになってしまうこと、にもかかわらず状況は全く改善されていないこ

見える。この小さな漁村は、目の前の工業用港湾施設を巡って政府への抵抗を続けている。

人口が急激に膨れ上がっているバンコクの機能を移すため、チョンブリ・ラヨン両県にまたがる東部臨海開発地域は大工業地帯に生まれ変わるべく開発が進められている。重軽工業団地、天然ガスパイプライン、ダム、工業用道路などを含む広大な土地を確保するために多くの村が収容され、村人たちは程度の差はあれ、僅かな補償金を手に代替地へと移って行った。レムチャバンは工業用港の建設のための収容地に指定されていたが、先の暮らしのめども立たない代替地への移住に不安を訴え、立ち退きを拒否している。この辺の事情はNHKテレビや松井やよりさんの朝日新聞の記事でも紹介された。日本はこれまでODAで多額の資金を投入しており、このプロジェクトのマスタープラン作りや事前調査もJICA(国際協力事業団)が行っている。工業団地では多くの日本資本の工場がすでに稼働しているが、実はこのプロジェクト自体が日本企業に利益をもたらすものであることがODA調査研究会の調査でも明らかにされている(検証日本のODA)。タイを訪れた機会に「生活を破壊し、日本企業の利益に奉仕する」と批判

とによるいらだが、その原因とされた。AWAの紹介文や、日本でのタイ女性が巻き込まれた事件のレポートなどを読んでもらうことで、その誤解は解けたものの、先生たちの言葉の一つ一つが重い。先にやってきた日本のマスコミと、どれ程の違いが私たちに本当のところあるのだろうか。この重さを忘れるわけにはいかない。

「日本のODAは一体何処に使われているのだろうか。私たちに実感は全く無い。もしかしたらダム建設はそうだったのかもしれないが、電気が来るようになって暮らした貧しさに変わりはなく、かえって子供達はテレビで見る都会暮らしに憧れてどんどん出稼ぎに行きたがるようになってしまった。でも行った先で何がその子たちの身の上で起きているのか全く判らない。正確な情報をもっと入れれば、ここで子供たちが出ていくことを食い止めることが出来る



日本へ行った娘の送金で建てた豪邸前の両親
—タイ北部・ドックムタイで

される典型的なODA大規模プロジェクトの実態を見るため現地を訪ねた。土地収用の話があると、村長や僧侶は村の土地まで勝手に売って出て行ってしまった。話をしてくれた女性の夫は港湾局に努めているが、レムチャバンの開発に反対したために異動させられ、今はバンコクまで片道三時間もかけて通っているのだという。

話を聞くと、村人たちが立ち退きを拒否するのももつともだと思ふ。なにしろ他所に行かなければならぬ理由など何ひとつないのだ。この辺りで持ち船のある漁師なら工場労働者を軽くしのぐ収入があるし、なにより村人みんなが親戚のようなもので泥棒もいない。村人の口座に勝手に土地の補償費が振り込まれることまであったそうだが、暮らした金は問題ではないのだ。

人々は決して反開発を雄弁に語るわけではないし、開発そのものに絶対反対というのでもない。その静かな暮らしそのものが、暮らしを無視した開発を進めるものたちへの強烈なアンチ・テーゼになっている。観光客に見せる「タイの笑顔」でも開発に蹂躪される哀れな人々でもない、タイが本来もっていたに違いない豊かさとはこんなものだろうか。日陰の緑台に女も男も、年よりも子供も

のではないかと思う。

村には十分な仕事は無く、安定した収入は公務員しかないに限られている。後は日雇い仕事ぐらい。小学校だけは援助を受けて卒業できるようになってきたが、それでも収入がない状況は変わらない。学校へ行ったら何になる、と言う気持ちもあり、この学校でもちゃんと卒業しない生徒も多い。(何とか学校を続けさせたいとムック先生は自宅を開放して子供達を一九人も下宿させて面倒を見ているそうだ)

この近くのM村では以前女の子の五〇%が出稼ぎにいらっていた。赤土で、畑は痩せ、換金作物は作れない。水は雨に頼る。雨が降らなければ借金がかさむだけ。今はFARMなどの指導もあり、経済安定のプロジェクトで和紙作り、造花作りをしたり、借金をしないで済むような資金作りとして、毎月一軒一〇バツ(五五〇円)づつの貯金を村ぐるみで進めている。一ヶ月一〇バツが精一杯というのが悲しいが実情。

日本に憧れる子供達に、行くなと言いたい。でも十分な説得力がない。どうしても行くといえれば止められない事が悲しい。「ヤグザ」について、日本の政府や警察は、組織的人身売買だということになぜ何もしないのか。タイの警察

みんなが一緒に座っておしゃべりしながらゆでた貝をつまんでいる姿は夢のように美しく、でもとても自然なだった。

帰り際に、お昼をこちそうしてくれた家のお父さんが言った。「またきつとおいで。私達は、どこにも行かずここにいますから」(本山 央子)

出稼ぎの村 ドックムタイで

北部にあるタイ第二の都市、チェンマイは、もとは独立文化圏だったとか、どの旅行案内を見てもこの街がどんなに素晴らしいかが、数々の見どころと共に紹介されている。けれど私たちのスタディーツアーはほんの一時間の観光タイムの余裕もない。チェンマイ大学、パヤップ大学で研究者の方から「女性と開発」に関しての、それぞれの取組みなどをお聞きし、二二日にはパヤップ大学のマイクロバスをチャーターしてドックムタイ郡へ。ある学校(中学と高校)で「FARM(農村開発団体)」という農村生活改善運動を進めるグループが、学校と共催で生徒たちを対象としたサマーキャンプを行っている最中とのこと、私たちはそこを訪問する了解を得たのだった。

チェンマイからバスで三時間、どんどん山道を登り、東へ向かう。道などと同じように無力。やらなくてはならない、手に余りそうな問題ばかりだが、でもお互いに情報を交換しあって頑張りましょう。

帰道、たんぼで田植えをしている元気な女性たちの写真を取らせてもらった。「一緒に田植えをしていきなよ、お酒もたっぷりあるよ」と声を掛けられ、タマリンドの不思議な実を味わせて貰った。豊かな暮らしという言葉がまた渦巻いた。(丹羽 雅代)

山岳民族 ヤオの女性たち

他のメンバーと別れたあと、私は、チェンライ、さらにメーサイへと足を伸ばした。

チェンライに着いた私たちはまず、日本人の豊田武雄氏が中心となっているHWP(Hill-Women Study & Development Project)の事務所を訪ねた。

そこから、三台のジープに分乗し、目的の村まで約三時間走った。パヤオ県バーデー村。緑の森に囲まれた二〇軒ほどの村は、静かなたたずまいを見せていた。村の横を、山々から湧いたばかりの水を集めた川が流れている。村のどこからも仰ぎ見ることのできる岬々たる岩山はラオスとの国境である。一家族一〇人以上、ときには二

三家族がまとまって住むため一軒ごとの家は大きい。中にはチーク材の板で屋根を葺いている家があり、かつてこの村の周辺が豊かな森林であったことがうかがわれる。

村の仕事の八〇％は女性によって担われている。しかし、女性には何の生活上の決定権もなく、すべては男性主導で決められていた。

HWPのプロジェクトは、こうした女性たちが自ら「開発」に参加する一つの手段として、悩みを打ち明けあい、日常の知識や社会的権利、法律、保健や教育、農業技術などを学び合う時間と機会を定期的に提供し、グループ化を側面から支援するというものである。焼き畑農業だけの村の経済は苦しい。最近、刺繍などの伝統的技術による収入向上プロジェクトも始めた。プロジェクト推進の中心は、この村に二年前から住み込んでいる、二二才の女性ワー



村で働くヤオ族の女性—タイ北部・バヤオ

カー、ワンサー・セーフィンさん。彼女自身がヤオ族の出身であり、言葉などの問題は全くなく、信頼を得ている。

この村の女性たちのまわりは強い。一つには次のような事件があったからだ。この村の子供と女性三人が、保健所の配った間違った薬を飲んで死んでしまった。今までの村の人々であつたら、運が悪いと考えて諦めてしまふところであつたが、HWPの講習会で法律の勉強をしていった女性たちは、向こう側に落ち度があつたのだからと、交渉して補償をさせることができた。また土地の問題が起つた時も、それを法律に沿った形で解決することができたという。また、家庭内で問題が起きても、今までは一人で悩んでいたが、このプロジェクトが入って来たお陰で、集まって皆で相談する機会ができ、解決できるようになったことが嬉しい、と女性たちは言う。

男性と女性の力関係も変化してきているようだ。「女性のいうことは使えない」という意味の諺があつたが、最近では「女性の言うことにも聞く耳を持ったほうがいい」という感じに男性側も変わってきた」と女性たちは笑う。女性たちが、まとまって活動してきたことが実際に力になるのを見た男性たちは、自分の妻た

ちが一体これから何をするのか、どこか戸惑いながら、かげからそおつと見ているようだ。

売買春についての考え方も、女性グループでの学習を通じて変化しているようだ。売春をして収入を得ることについては、一部では、女性が収入を得て、家族のために働けるのは素晴らしいことだというような見方があつたが、HWPの資料や、売買春についてのビデオなどを見る中で、売春で稼ぐことは、本当に正しい方法ではないのではないか、という認識に変つてきたという。また、教育を受ける機会も、男の子の方が多かったが、女の子に対しても教育を受けさせなくてはという認識が浸透してきた。

私は、この村の女性たちとHWPのワーカーたちに、「開発と女性」というテーマの重要性を、改めて見せてもらった。

集まりの終りに、一人の女性がヤオ族の伝統的な歌を歌ってくれた。私と同じ二七才の彼女は、四人の子持ち、顔の表情に人生の深さがあつた。ヤオの歌は即興で、特別に習うものではなく、また、だれでもが歌えるわけではないと言う。一曲目は、歓迎の歌。二曲目は、ヤオの女性の人生(生活)の歌。

経済格差の中の犠牲者たち

東大大学院留学生 ニクン・ジツタイ

貧富の差の拡大

タイ女性たちは、なぜ日本にくるのか？第三世界共通の経済格差のせいなのである。しかしタイ国内の貧富の差も広がっている。

農作業は機械でなく、昔のままの手作業・雨頼りなので、大変。子沢山。バス代が払えないとか家事手伝いとかで、小学校に行けない子もいる。

一方テレビ情報で、購買欲や都会への羨望が刺激され、バンコクに出ないとダメという焦りがつる。

しかし短期間の季節労働者は、バンコクでも歓迎されない。物価が高く住まいもなく、屋台営業をしても違法で食べられなかったりする。男は女と違い「人類最古の商売」の売春が得意なから、男に生まれて悔しい」と嘆く者もいるありさま。

エイズ問題

アジアからの髪と目の黒い留学生たちは、ほとんどが日本で差別された経験をもつ。エイズ問題で「タイは怖い」という人種差別が高まらないか、心配。

最善の対策は？

タイでは、真面目に売春を摘発する警官もいれば、暴力団と組む警官もいる。公務員の給料が安いため学生時代は正義の人でも、上司も周囲も賄賂を受け取っていると、プライドが崩れ、悪に染まってしまう。

地方では、子は労働者であり、女子は十五才ぐらいまでに売春を始めると。これに対する仏教の教えも問題。モノ・金ではなく、文化や社会性を身につけ、他人に迷惑をかけず、慈善の心をもつた子に育つことこそ大切なのだという、価値観の大変革が急務。

またテレビは、軍の支配が二局、国営が三局で、日本の「スクープ」のような番組が放映される自由はない。山岳民族の大人には、タイ語が解らない者も多いし、国籍がない者すらいる。

こうした現状をふまえ、最善策は、正しい情報の普及と教育の高度化(中三までの義務教育延長は、いぜん計画のみ)だと思ふ。

人は環境に影響され育つ。だから学校教育は万能ではない。最後は、本人が自己改革するしかないのである。

広がりのある、力のある声、自由に翻るような舞うような旋律の変化。豊かな川が狭い岩の間を通り、深い淵をたゆたい、変化しながら途切れることなく流れていくような歌声だ。ヤオの女性の生活全てが込められているように感じた。

最後に祝福の歌。大意は「これからの旅行がいいものでありますように。私たちの所にわざわざ訪ねて来てくださってありがとうございます。村の中には、すぐ麓の町チエンカンにも出たことのない人が居るのに、わざわざ皆様が日本からきてくださったのは、皆様が本心に心から私たちのことを思って下さったのだと思います。私たちの生活は、川の両岸のように離れていますが、日本から来た皆様の心遣いは、私たちと日本の皆様との二つの川の岸の間に流れる水のように、いつまでも乾かないものでしょう。」

習朝、さわやかな村の道を散歩して、数枚の看板に気付いた。エイズと売買春についてのものだった。「娘を売るのはやめましょう」という意味の立て看板は、山間の小さな村に花に囲まれて静かに立っていた。(吉田 美穂)

アジア出稼ぎ女性 異郷の死(85年〜91年)

85年1月	千葉県旭市のモテルで比女性(自称ヒルダ、身元不明)日本男性に殺される。
86年8月	鈴鹿市のアパートで比女性(23)が若い男から逃げようとして転落死。(P12参照)
12月	山梨県中央道で比女性(21)が比男性に刺され焼死される。
88年2月	山梨県中央道で比女性(21)比男性に刺され焼死される。
2月	岐阜市で比女性(19)キャバレー店長に殴り殺される。
4月	静岡市のアパートで比女性(27)栄養失調死10日後に発見。
5月	東京の比大使館前に遺棄されていた比女性5日後に病院で死亡。
7月8日	大阪ミナミで台湾女性3人相次いで自殺。
89年1月	東京新宿区マンションでタイ女性(21)日本男性に殺される。
2月	千葉県流山市のアパートで比女性(21)衰弱死。
6月	千葉県市川市でタイ女性(24)バキスタン男性に刺殺される。
8月	浜松市のマンションから比女性(24)飛降り自殺。
10月	東京新宿区のホテルでマレーシア女性(25)殺される。
11月	四日市のアパートでタイ女性(33)刺殺される。同居のタイ女性逮捕され犯行を否認不起訴に。
12月	松山市道後温泉のマンションでタイ女性(29)首など切られ殺され、同居のタイ女性3人が安否不明。
90年6月	東京中野区のアパートで比女性(20)暴力団員に殴り殺される。(P12参照)
6月	諏訪市の集合借家で比女性(28)が日本男性に殺される。
91年1月	東京新宿区のホテルでタイ女性(21)が殺される。
1月	宇都宮市のホテルでタイ女性(30)が日本男性に殺される。(P11参照)
3月	大阪ミナミでタイ女性(38)マンション自室から飛降り自殺。
9月	福島県で比女性(22)死亡、劇症肝炎の死因に家族が疑問。
9月	和歌山市のマンションでタイ女性(27)が刺殺され、タイ人男女3人を重要参考人として手配。
10月	東京新宿区マンションでタイ女性(25)が同居のタイ女性に刺殺される。(P9参照)

このほか、交通事故死は風俗営業で深夜に移動が多い、酒酔い運転の車に同乗などのせいか、件数は多い。88年には埼玉県寄居市で台湾女性(30)、東広島市で比女性(28)、89年名古屋で比女性(25)、91年越谷市でタイ女性(26)、長野県北佐久郡でタイ女性(2)など。多くの女性が人身売買組織を通して偽造パスポートで来日するため、殺害、自殺、事故死、不審死など、警察もいまだに身元を確認できないケースもある。(支援団体など調べ)

日本の経済力とタイ女性の性搾取

過去十年間、タイの産業化に向

ての努力は、豊かな国々から、巨額の外国資本を誘引した。この発展なしの産業化の過程は、タイの天然資源の膨大な流失と破壊をいまままでになかった規模でもたらした。言うまでもなく、日本は過去、現在において最大の投資国である。日本の投資は、タイ国内の消費用だった過去とは全く異なり、今日では、輸出向けに重点を置くようになった。それはタイの安い労働力、柔順な女性出稼ぎ労働者、安い原料、等が主な理由である。

日本の強い経済力は、日本国内においても、合法あるいは、非合法で働こうとする多くのタイ出稼ぎ労働者を引きつけている。ほとんどの不法労働者は、日本人より低賃金で、長時間働かされている。言葉や文化、そして回りの状況の違いにより、不利な地位にたたされ、彼女たちは、保護を求めないままに、非常に搾取されやすい状況にある。今日の肥大化した性産業界で、日本はタイや、フィリピンからきて、売春をそのかさねたり、強要されたりする外国人女性の中心となった。彼女たちの多くは身体的に虐待されている。

家父長制と貧困、そして女性の体の商品化

十一・九歳の若い出稼ぎ少女の圧倒的多数がその原因としてあげられるが、家族にのしかかる貧困を軽くしたい、という理由である。これらの若い出稼ぎ女性の多くが、製造業に吸収される一方、少数の少女たちが、より多くの収入を求めて、売春の道に入っていく。売春は六〇年以降、犯罪とされているので、タイで公式の売春者の数はわからないが、約五〇一〇〇万人の売春婦がいると推測されている。今日タイの売春女性の年齢は益々低下し男性の売春も増えている。

今年の六月に、観光客としてタイに入国した日本人ビジネスマンのグループが、教育を受けたタイ女性に對する奨学金の広告を英字新聞にだした。それは日本に学生として五年間滞在し、帰国後は、その企業がタイ北部に建設を予定しているホテルで働くというものである。選考の方法は、非公式にあるホテルで行われ、美人女性だけが選ばれた。しかしそれはいかかわしい方法で行われたので、日本で売春をさせる目的ではな

いかという疑いもたれ、この企業を現在、犯罪抑制局で調査中である。われわれが、よく知っているように、一度国際的な性産業にはまった女性は、ほとんど逃げ出すことはできない。食い物にされ、あるものは苦難を生延びるが、殺人や自殺と同じように、虐待されたり、麻薬の乱用のようなケースは、少しも珍しくない。最近日本のある地方自治体は、中絶による出血のために死んだタイ売春婦の遺骨をタイに送り返した。その女性は亡くなった時は、ほとんど無一文で、その後たつた二、三の私物がみつかり故郷に返されたといわれた。

われわれは、いまこそ純粋な目で、タイだけでなく全世界における悪と売春問題の根源をみつめよう。家父長制社会、貧困、農業国と工業国、都市と農村の経済不均衡のなかで、ますます精巧なやり方で女性の体の商品化が複雑にむすびついている。他の途上国のように、タイもこの売春現象には、特別な時代的背景があった。十九世紀のなかばの大量の中国人移民、アジアでのアメリカの存在、太平洋戦争、朝鮮戦争、そして最後に最も特筆すべきベトナム戦争、そ

のつど買春は拡大していった。八〇年以降、タイ政府による観光促進政策で観光が国家収入の二位を占めるようになり、バンコクは「アジアで一番大きい買春宿」とよばれても、驚くにはあたらぬ。

結論

日本での売春に引きつけられるタイ女性のケースは、二国間の経済的不均衡が直接の原因である。それはまた、両国において、家父長制の下での、男性による管理社会が黙認されているということでもある。わたしは、アジア女性フォーラムと、その問題に取組む意気込みを知り、慰められた。性搾取の被害者を助けるフォーラムやほかのグループとの連帯とは別に、私は他のより深く、複雑な意識の問題の質問を投げかけた。なぜ日本の性産業は、外国人女性を求めると、私は疑問に思う。そしてどのようにして、日本女性はその高い経済的地位にいて、アジアのシスターたちを助けることができるのか。

一九八九年「PP21」アジア女性フォーラムに寄せて

(訳 菅谷哲子)

村の娘たちはこうして買われる

—タイ・ネーション紙ルポ エブリン・ギラデット—

タイ北部のソングライン(灌仏会、昔のタイ暦の新年)。この時期は北部出身者が皆、家族のもとへと帰る時期だ。買春宿のオーナーにとつては新しい女性を勧誘するときでもある。

のどかな村。子どもと鶏がほこりっぽい道を駆け回り、犬が道のまん中で寝そべっている。車の姿はなく、オートバイが二、三台いるだけ。

突然、まるで映画の一シーンのように黒くてピカピカのBMWがやってくる。アンテナつきで色ガラスの車だ。夏の間だけ、こんな高級車が北部の村にやってくる。買春宿のオーナーたちがやってくるのだ。彼らはこの時期に来年の

契約の更新と新人探しを行う。四月は売春婦たちが村へ戻り、家族とソングラインの祭りを楽しむ月だ。買春宿のオーナーたちも南部に連れて帰る女性目当てにやってくる。この時期が一番選択権が多い時期なのだ。オーナーたちが持つ「金」は少女たちに強烈な印象を与える。買春宿がいかに儲かるかを示すことで少女たちを魅惑するのだ。

「オーナーたちはこう言いたいのだよ。見てごらん。自分たちはこんなに金持ちなんだ。自分たちのところへ来れば、おまえも金持ちになれるってね」ヤラ県のベトンで三年間売春婦として働いていたナットがいう。

「この商売ではオーナーたちだけが金持ちになるんだってことは誰も口にしないものね」

オーナーたちは高級車を乗り回すだけでなく、派手な洋服を着て、最新の携帯電話やカメラを持ち、金の鎖をジャラジャラさせている。たいいてい回りにボディガードや運転手をはべらせている。

北部への旅

何年かかけてオーナーたちは北部への足がかりを築いてきた。彼らは一年に一回は北部四県のランブーン、チェンマイ、チェンライ、パヤオの決まった村を訪れる。それぞれの村で売春婦自身、あるいはエージェンとなる村の住人と契約を取り交わす。プラシットによると契約は、どんな女の子が買春宿行きにふさわしいか知っている村長と取り交わす場合もあるそうだ。

このようなコネクションは買春宿のオーナーたちと、村人にとって信頼が厚く、親しい人たちとの間でつくられている。一方、ある売春グル

ープのボディガードは一年のほかの時期はベトンの警察官であるという。「ソングラインはランブーンの役人たちと一緒に過ごすんだ」プラシットはいう。オーナーたちはジャナリストがまわりによいさうがいまいが気にしないし、何も隠そうとしない。富と権力が彼らを敵なしにしているのだ。

コネもあるし、自由にビジネスを行えるにもかかわらずオーナーたちは今年には不満げだ。北部で女性たちを探すがだんだん難しくなってきたり、あるいはあるオーナーによると、旅行客が増えたせいで北部にはたくさんのお金が稼げるのだと思われている。

のに、今年はたった六人だけ。

「ほかの宿じゃ、一人しか見つけれなかったそうだよ」プラシットは頭を振る。南部行きの女性の数が減っただけでなく、女性の価格そのものも高くなってきているという。

「去年は上等な子には五千から一万バーツだったのが、今年は一万から五万だ。とびきり上等の子には十万も払ったよ」一人のオーナーが不機嫌に言い捨てる。

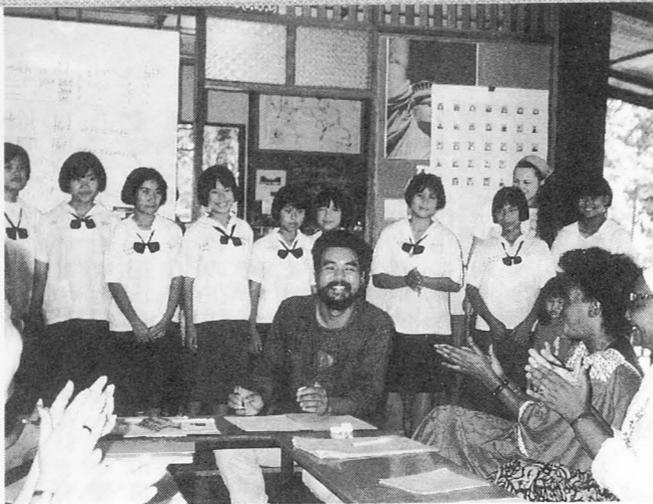
村を訪問しているあいだに、あるオーナーは二十分ほど姿を消した。戻って来ると自慢げに写真を一枚見せている。

「見ろよ。来年度の女の子だ。きれいな子だろう？」ほかのオーナーたちが写真を見て確かにきれいな子だと認めると得意になっている。その子の値段はオートバイ一台分だ。

普通バージンの子をつかまえるのは一年に二人がいいところだそう。デュウの話では、どの宿でもバージンを待ちわびていて、これこそ本物の獲物なのだという。

決断

「仕事を続けるべきか」「もっといい選択があるだろうか」「外国で働いてみようか」「もし売春宿で働くとしたら、どの宿がいいのか」故郷に帰ってくる買春宿たちはこんな質問を



売られる寸前で「娘たちの教育センター」に引き取られたタイ北部の少女たち—メーサイド

自分自身が酷使されながらも、なぜ他の人にも同じ仕事に加わることを勧めることができるのだろうか。

ここで売春婦とオーナーの関係はただの雇用者と労働者の関係ではないことを思い出さなければならぬ。オーナーは一年の間、売春婦を完全に支配する。もし宿が望むような女の子を紹介することができるなら、オーナーは翌年から彼女に対してよく取り計らってくれるだろう。

ヨーが友人に「オーナーにだまされてしまったわ」と不満をいっている。しかし新人の女の子が部屋に入ると急に黙ってしまう。友人がその新人の女の子をオーナーに紹

自分自身に問い、家族や友だちにも相談する。ナットの話では、売春婦の「最後の決断」に関してオーナーたちはどうすることもできないのだという。

「わたしはオーナーの言うことは聞かないわ。来年どこへ行くか決める前に友だちたちに話すの」村では誰かが必ず自分の興味ある買春宿について情報を持っている。たとえ外国へ行くのだとしても、何をすべきなのかを教えてくれる情報網が村中に存在する。

「今年は日本に働きに行こうかと考えていたの。近所の人が夫と子どものために去年日本へ行って沢山お金を稼いできたものだから」タウは言う。

しかし知合いが日本の売春はひどいのだと教えてくれた。日本で働くとな不法滞在になって、自分たちを守る権利が全くないのだそう。タウはタイにとどまることにした。

経験を積んだ売春婦たちは大きなお金に目を眩ませてはいけないのだということを知っている。

「わたしは買春宿に行くときは一万バーツ以上は要求しないことにしているの。それ以上望むとかわって借金が増えるし、貯金しはじめると時間がかるのよ」ポムが説明する。ポムは経験を積むことで、手堅くお

金を稼ぐことが、結局は多くのお金を手に入れることになるのだということを知った。

一般的に女性たちはオーナーの言うことより友だちを信じている。オーナーたちのことは常に疑い、軽蔑している。

利用されてばかりのやりかたに売春婦たちはうんざりしている。(売春婦たちはオーナーが両親に支払った金額の倍の返済をしなくてはならない。もし両親が二万バーツ受け取っていたとすると、稼ぐ前にまず四万バーツの働きをしなくてはならない。たとえ四万バーツ働いたとしても、その後稼ぎの半分は買春宿に取られてしまう)

売春婦たちはよくオーナーにだまされる。

「オーナーはいつも私たちをだますの。今年私は五万バーツ稼いだのに、オーナーは二万しかくれなかったわ」ポムは言う。こんな話は何度も何度も繰り返されている。オーナーに対しては手も足も出ないため悔しみがつのる。彼女たちはオーナーたちからの虐待に対してなすすべもない。強くてハキハキした女性であるヨーですら、お金を取り戻すことはできなかつた。

新しくオーナーになったデュウは女性をリクルートするだけのお金も

「友だちから売春のことを聞くまでは、一体どうやってたらお金が稼げるのかわからなかったわ」ナットは言う。家族は絶望的な状況だった。母親は「行かないで」とナットに頼んだが、ナットには売春しか、家族が生きて延びる道はないように思えた。「ナットが行ってしまったとき、病気で寝込んでしまったとき、病気が面倒を見てやってきてくれたんです。今でもナットが定期的に手紙をくれないと気分がわるくなるんですよ……」

うれしいことに、ナットは今マレー人のボーイフレンドがいて、ナットと生まれて来る赤ん坊の面倒をみてくれるのだそう。だからもうこれ以上売春宿で働かなくてもすむ。

一方、ポムの両親は娘が買春宿に行くことを勧めている。タウの話では、ポムの両親は土地を売り払ってしまい、いつも酒を飲んでいてため仕事をつまみつけることができないのだという。ポムの親は売春で娘たちから生活を支えてもらえるとわかると上の娘をベトンへやった。ギャンブルと酒のため、まだお金が十分でないポムを送った。家族の金のほとんどがギャンブルに使われており、十四歳になる下の妹は、すでにオーナーから売春婦になるものだと思うられている。

経験もない。しかしポン引きとして前のオーナーに雇われていたため売春婦たちから信頼されている。売春婦たちはデュウが他のオーナーたちのように損な契約を持ち出すことはないと思っている。そのためデュウは五人の少女たちを買春宿に勧誘することに成功した。

新しい世代

ソングラーンの時期には、すでに性産業で働いている姉妹や友人、親戚を追ってこの仕事に入る女性が多い。知合いの後追いをする女性たちは新しい世代の女性たちだといえる。オーナーの富に目が眩む人もいるが、こういった新しい世代の女性たちは既存の情報ネットワークにたよることはない。

宿選びをするときに大きな役割を持つのは友人たちといえるが、初めて働きに出る女性たちにとって、友人たちのアドバイスというものはあてにならない。オーナーが村に来ると、オーナーの宿で働く売春婦たちは、新規の契約のため手助けをする。もし彼女たちが今まで働いたことのない女性やバージンを見つけると、オーナーは大喜びだ。

売春婦たちが一体誰に忠誠心を感じているのか不思議に思うだろう。友だちに？ それともオーナーに？

オーナーたちの訪問は売春婦の家族を当惑させている。ポムの弟たちは、一日中前庭でサッカーをしているが、BMWの姿が見えると突然ゲームをやめてどこかへ消えてしまう。いつもは訪問客が来ると家族全員が集まり、おしゃべりをするのだが、このときばかりは女たちだけがオーナーとやりとりをする。

女たちはかわるがわる台所へ行く。「ここに座って、料理して、そしてオーナーたちと話すのよ」ポムは言う。オーナーをもてなすポムはいつになく物腰柔らかく、気はずかしそうである。いつもはあからさまに悪口をいうヨーも態度を変えている。オーナーがお金を少しばかりくれると、謙遜し、感謝している。

売春婦とオーナーたちの関係にはうんざりしてしまう。売春婦たちはオーナーを嫌っているが、家族は富と権力に恐れをなしている。ポムの父親がオーナーとのやりとりで見せるしぐさは、何かを恥じているように思える。彼は娘をオーナーに「売った」のだということ、そして新しく手に入れた富は娘を売ることによって得られたのだということに気付いているのだ。(訳 渡辺美冬)

*フライバシーを守るため、全ての名前は変えられています。
*一九九〇年五月八日付
*一バーツは約五・五四

タイ地報告

押しよせる観光開発

タイ北部

（タイ女性支援基金・チェンマイ在住）吉田直子

タイ北部上地方八県（チェンマイ、チェンライ、ランブーン、ランパーン、メーホンソーン、ナン、パヤオ、プラー県）に跨がるランナー地方の歴史は古く一三世紀後半に遡る。一二九五年メンラーイ王によって、チェンマイを都として築かれた独立国がランナータイ王国である。以後、タイ、ビルマからの侵襲、動乱を繰り返しながらランナータイ独自の伝統文化、芸術、言語が生れ、受け継がれてきた。チャオプラヤ川に注ぐピン、ラン、ヨム、ナーン川流域に広がるこの地域は、豊かな緑を有し、大小の山々と穏やかな丘陵が幾重にも連なる肥沃な地である。山岳地帯には数多くの少数民族がそれぞれの民族独特の生活様式、宗教、伝統文化を守り続けながら暮らしている。南国にしては涼しく穏やかな気候風土と自然の恵みの中で培われてきた人々の気質もおっとり優しい。

しかしタイ全土を巻き込んでいる急速な近代化によって、今この緑豊かなランナーからも多くの森が消え、貧困に喘ぐ人々を生み出している。北部第一の都市であり、観光地としても知られる、チェンマイは近代化の波を逸早く受けた。ステープ山の裾野に広がる市内には、都の栄華を忍ばせる城壁、城門跡、仏塔が見られ、かつては静寂なたたずまいをみせる街であった。三年後には建国七〇〇周年を迎えるが、その歴史の中でも近年の変貌は凄まじい。わずか三、四年で車の数と地価は一〇倍に膨れ上がった。その後を追って観光事業に乗り出したチェンマイ県では国際空港新設や将来ミヤンマー、ラオス、中国を結び交通網の玄関として注目され、現在観光開発が急速に進んでいる。

このような観光化や工業化が進むにつれて引き起こる悪影響は、その恩恵をほとんど享受することのない農村部の人々に覆い被さっている。北部では山岳地帯が面積の六八パーセントを占めており、耕作用の土地は限られている。その上、リゾート開発、アグリビジネス、工業団地、鉱山開発、政府の公共事業などへと土地の使用用途が変わってきた。これらは環境破壊、汚染だけに止まらず、農地を持たない農民を増やし、彼等の就業形態に変化をきたすことに繋がる。

ごく少数の金持ちや外国人のレジャーのために膨大な土地を要し、数多くの住民から農地や水を奪うゴルフ場などはその最たるものである。農地を持たなくなった人々はどうなるのだろうか？二、三年前、土地投機ブームになった頃、大金と引き替えに土地を売却した農民たちが成金になり注目を浴びたが、適応する術のない彼等は、結局もとの貧困にもどってしまったという話である。農業を続けても高い小作料を払わなくてはならず、結果的には農業以外の収入に頼るようになる。例えば土地を売った金で車を購入し、日雇い労働者として町へ出掛けていく者もいる。チェンマイ市内でも朝夕近郊の村からトラックの荷台にすし詰りになって建設土木現場に向かう人々の姿があちこちみられる。それでも彼等の就労の機会は限られている。子供の労働力にも頼らざるをえない。この地方の女性、少女たちの多くが売春婦になっているというのには、はや周知の事実であるが、その直接の原因は依然として貧困であっても性産業の恰好のターゲットとなる北部女性の容貌、農村部の女性の役割

（負担）の重さ、地域に根付く売買春に対するおらかな価値観、買春を煽るような観光事業の奨励など幾つもの要因が重なっていることは言うまでもない。また親が（物質的に）豊かな暮らしを求めて子供を売春婦として売り飛ばしたり、彼女たちが自ら進んで性産業に入るケースが増えている。急速な消費文化の浸透によって、人々の思考はいともたやすく物質主義的思考へと変化している。小学校を出たばかりの少女たちが都会に憧れ、無教育な親たちが将来的なことよりも目先の利益に飛び付いてしまつても仕方がないのかも知れない。

彼らをここまで追い込んでるのは経済発展に重点を置いた開発計画を進めてきた政府自身であり、少数が豊かさを享受するために多数が搾取されるというタイ社会、さらに日本も深く関わっている南北構造のあり方である。

八〇年代後半に遂げたタイの経済成長は確かに奇跡的であった。しかしその陰で失われた自然や犠牲になった人々の数は計り知れない。今年からスタートした第七次タイ国家開発計画はいまままでの反省と経験を踏まえて『持続可能な開発』をスローガンに掲げている。『質』を考慮し、人々と共に歩んで行く真の開発が求められている。

タイ地報告

女性運動見たまま

（タイ女性支援基金・バンコク在住）大倉弥生

驚異的な経済成長を背景に活気づく首都バンコク。街を歩くと、さまざまな形で働く女性たちに出会う。お金を自分で稼ぐことを「社会進出」とよぶのなら、タイは女性の社会進出が日本よりも進んでいるといつていいかもしれない。

個性的なデザインのスーツに身を包み、さつそうと職場へ向かうオフィスワーカーの女性。あるいは肩章のついた茶色の制服の公務員。高等教育を受けた女性はいいて職業をもっている。歩道を占拠するように並ぶ屋台で、タイそばを売ったり焼きバナナを売ったりだもの売ったり、小さいながらも店の主人として商売をするのは多くが女性だ。タイの男性は「女は外に出るな」という男権を振りかざさないかわりに、家族に対する責任感が薄い面があるので、働き者の女性がこうして家計を支えている。建築現場で働く出稼ぎの労働者たち。この中にも女性がいる。男性と同じように、ビルに上りセメントを運んだり、今の日本では見られない光景だ。市内バスの運転中の中にも女性がいる。

は、女性が外で働くことに対する偏見が少ないこともあるが、働かなければ食べていけないからという側面も大きい。タイでは女性は象の後ろ足にたとえられる。前足（男性）の常に後ろにあるものというわけだ。やはりこの国でも女性に対する差別意識は根強い。こうした状況に対し、女性の権利を守るための活動も活発である。簡単にタイの女性団体を紹介してみよう。

＜女性の友財団＝Friends Of Women Foundation: FOW＞。一九八〇年設立（九二年に財団化された）。女性問題への理解を一般に広めるためのさまざまなキャンペーン活動を行なう。女性工場労働者の健康や福祉向上のためのプロジェクトをもち、強姦や強制売春、夫の暴力などに苦しむ女性を法的に援助するため、メンバーには弁護士も多い。全国各地の女性グループのコーディネーター的役割も果たしている。ニューズレター（タイ語版と英語版）のほか一般読者向けの季刊雑誌も出しており、最近では農村の女性向けの新聞の発行も始

＜女性財団＝Foundation For Women (FFW)＞。一九八四年に始めた女性情報センター（海外への出稼ぎを望む女性へのカウンセリング活動）のプロジェクトと、一九八六年に始めた家庭内暴力にあう女性のための電話相談と避難所のプロジェクトを財団化して一九八七年に設立。同年に児童買春を未然に防ぐためのカムラープロジェクトを開始。人身売買を子供にわかる形で描いた絵本「カムラー」（カムラーは主人公の少女の名）を作り、地方の学校に配布している。ニューズレター（タイ語、英語）のほか「女性手帳」「メール花嫁」「異境に行くタイ女性のために」など出版物も多い。

このほか、歓楽街で働く女性の教育活動を行う「エンパワー」、女性と子供のための緊急避難所「エマージェンシー・ホーム」、アジアへの出稼ぎ女性を対象にした「アジアで働くタイ女性の友：FOWIA」などがあり、それぞれ常に連携して活動を行っている。チュラロンコン大学、チェンマイ大学などの国立大学には女性学研究プログラムが設置されている。女性団体の多くは海外の団体

からの資金援助で活動しており、専用の事務所をもち専従スタッフが働く。最近、いくつかの問題が女性たちの共同行動を呼び起こした。タイでは女性が外国人と結婚した場合、子供はタイの国籍をとれない。この父系主義の法律の改正を求めてデモをしたり、出産休暇の日数改善を求めデモもしている。エイズとの関連で売春婦を登録制にする法改正の動きがあった時には、これは売春を合法化するものだととして、政府に見直しを申し入れている（改正案は未通過）。タイではエイズ予防策としてコンドーム着用キャンペーンが盛んだが、これに対し女性団体側は「コンドームを着けるより、買春しないことが先決」と主張する。

タイの女性運動は、売買春、低賃金出稼ぎ、夫の暴力といった問題により具体的にストリートに取り組み一方、社会的アピールの必要などときには広くすばやく行動するのである。



バンコク（女性の友財団）事務所の入り口

バンコク・タニヤ通りの日本の男たち

「アジアの買春に反対する男たちの会」 谷口和憲

タイのバンコクに「タニヤ」という日本人専門の歓楽街がある。二百メートルぐらいの通りには、所狭しと、たくさんバーが入り乱れている。これらのバーはいわゆる「カラオケバー」のスタイルを取っており、ホステスの女性たちはお酒を注いだり、一緒にカラオケを歌ったり、踊ったりして、男たちの相手をする。ただ、通常のカラオケバーと大きく違うところは、客が望めば、簡単に女性たちを連れ出すことができることである。(これを隠語で、「オフする」という)

私は日本人男性がどのような意識で買春をし、その背後にどのような構造があるのか知りたくなり、このタニヤ通りで日本人男性にインタビューを試みた。以下、部分的に抜き出してみる。

—質問「オフされたことはありますか」／答え「まあ、それはありません」／「批判的な声や、反道徳的といった声に対してどう思われますか」／「日本も同じですからね。そうですね……、大人の東京デイズニードとして許してほしいですね。子供にデイズニードがあるのだから、大人にだってあっていいじゃないですか。それに選ばれたのがタイだと思います」

この男性の言った「デイズニード」という言葉に、日本の男たちの意識が端的に表れている。まさに、日本の男たちにとって、性は「遊び」でしかないのである。

—質問「タニヤが全然おもしろくないと答えた男性に」おもしろくないでも、一週間に二回もくるんですか」／答え「日本からお客さんが来るんで仕方ないんです。接待で来ているわけですよ」／「接待された人は何て言ってますか」／「たいがい日本から来る人は「女」が目的ですよ。だから、そっちの方ばかり行っちゃって」／「その後、取り引きはうまくいきますか」／「何かもう、常識になっちゃっているでしょ。こっちに来る人は、夜の女が目的だから、タニヤでもパッポンでも、もう常識だし、当然でしょ」

この男性はタイに住んでおり、日本から来る取引先の日本人を接待しているのだ。私がインタビューした八人中七人が、この「接待する人」「接待される人」であった。すなわち、昼はゴルフをし、夜は食事をし、酒を飲み、カラオケを歌い、最後に買春するという、「接待買春」の構造があった。

—質問「タイ人は日本人男性が女性を買っていることや、タニヤについてどう思っているのでしょうか」／答え「それはウェルカム(歓迎)ですよ。タイ人は、だつて金が落ちるだもの。ここに店が百件はあるでしょ。一軒に十人いるとして、ここに千人が住んでいるでしょ。ここでタイ人の女性が稼いでいるわけですよ。一日に何万バーツ、何十万バーツがここに落ちるわけですよ。それと同じようにタイ人は、日本企業がたくさんここに来ることをものすごく喜んでいきますよ」

この男性は、自分たちの買春が貧しい女性を救い、日本の企業進出が貧しいタイを豊かにしていると、非常に単純に考えている。

女性たちが、なかなか抜け出せない厳しい貧困の中にあるのを、自分の買春の口実に使っているのは本末転倒も甚だしい。また、日本の企業の経済進出のあり方が問われて久しいにもかかわらず、企業進出が買春と

『マイペンライ』からの出発

—タイ・ツアーで見たこと— 井原まなみ

今年の六月初旬、バンコク・チェンマイ六日間」のツアーでタイを訪ねた。二週間前には、軍事政権に抗議して民主化デモが燃えあがり、またしても学生たちの血が流された時期である。

バンコクは二度目。参加はわたしと夫の二人だけなので、行程は自由。しかし、ツアー旅行でいつも思うのは、その土地の日常生活に触れられないもどかしさである。

今回も、しおれかけた花輪が積み重なった手向られている民主記念塔のそばを何度か通った。また、デモの放火で焼けたまま、破れた窓が黒々と並ぶ高層ビルも、メイン通り沿いに数棟、目についた。

ところが、ガイドの女性は大卒なのに、そうした話題にはふれたがらない。観光業で生活している以上は、できるかぎり自国の美しいところ、誇るべき遺産、楽しいものを見ていてほしいと考えるのが、人情なのだろう。

こちらにその気がなくても、「白いアジア人」が先進国ツラをして、現地の後進性をあげつらうような感じになりかねない。そう思うと、無理に突っ込んで聞きだすことも、しづらくなってくる。

せめて、庶民の生活の場のひとつは見ておきたいと、市場には、かならず寄つてもらった。

年間で、もつとも暑いといわれる五月。その五月が過ぎたばかりだというのに、肉も魚もむきだしそのままの台の上いっぱいに並べられている。野菜や果物や調理品も、これだけのものを人間が食べるのかと疑うほど、広大な市場に延々と積みあげられていた。

タイは、かつては『田に米あり、水に魚あり』といわれて、国土の豊かさを誇っていた。農民や庶民の暮らしが食うに困らず安定していたからこそ、穏やかでやさしい国民性も生まれ、仏教や僧侶への尊敬も育つたのだ。

その国はいま、多国籍企業による貨幣経済の大波に呑みこまれ、のたうっている。工業化を急ぎ、アジアの優等生ともはやされていくが、農業で食えなくなり、都市に吸い寄せられる人々の生活は厳しい。

彼らもぐりこむのは、高層ビルの陰のスラム。名物の運河では、雨水をカメに貯めて暮らす貧しい人々の掘っ立て小屋が、どこまでもつづ



バンコクのお寺のお祭り

噂にきく交通渋滞も経験したが、二十分ほどの距離を二時間の立往生！バンコクで働く人の住まいは、日本並みに遠い。しかも、そのほとんどが車利用。大渋滞と殺人的排気ガスの充滿の道路で、バスのドアからはみだすほどの通勤地獄がくり返される。

夕方になると、あらゆる場所に出現する屋台で夕食をすませ、バス停に群れている人、人……。ようやく来てても満員で、ろくに乗りこめぬままの見切り発車。しかし、人々の表情は淡々として変わらぬ。

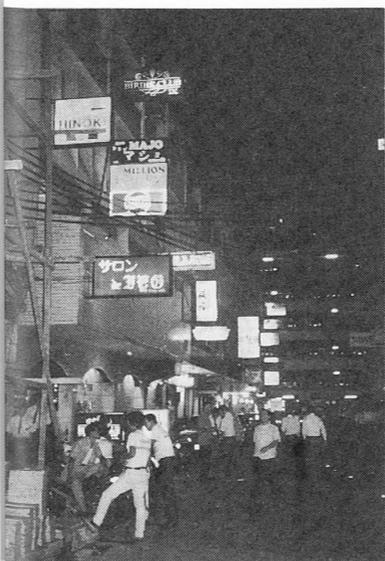
その辛抱強さに呆れはて、なぜ怒らないのか訊ねたら、「怒ってもなにも変わらないから」との返事。

タイには、『マイペンライ』なる言葉があるという。『しょうがない』『ぐらいの意味で、諦め』というか達観というか、なんでも『マイペンライ』ですませるのだそう。

同じようにタイに恩恵を与えていると言っているのは、同じ日本人男性として何とも情けなかった。

戦争中、日本の男たちはアジア各地を侵略し、各地で女性を強姦し、また、「従軍」慰安婦を連れ歩いた。戦後は、日本の男たちは軍服を背広に替え、アジア各地への企業進出とともに、女性を買い漁っている。さらに、最近では「国際貢献」という名のもと、遂に自衛隊員の「休息場所」であることは、暗黙の了解になっているという話である。自衛隊員もまた、支給されたコンドームを持って、タニヤに現れるのだろうか。自衛隊へのコンドーム支給の話は、戦争中、日本兵に支給された「突撃一番」という名のコンドームを連想させる。私たち、日本の男は、何度同じ過ちを繰り返せばよいのだろうか。たとえ少数であっても、私たちの会は「否」の声を上げ続けていきたい。

日本語の看板が並ぶタニヤ通り



たしかに便利な言葉で、わたしたちにもすぐ伝染した。

一流ホテルの浴槽がつまっても、マイペンライ。渋滞で見物場所がひとつ減っても、観光客値段でバカ高いシルクの店も、マイペンライ……。昔の歌のマネではないが、これじや年がら年中、コロツケならぬ『マイペンライ』。精神衛生の特効薬、生活の知恵、ということか。

しかし、表の顔はあつげたらかんと明るく穏やかでも、無視された憤怒は心の底深く激んでいく。ムエタイに熱中し、身を売りながらタイ人ホストに狂い、弱みにつけこむチーママを刺し……感情の爆発が起きる。

『マイペンライ』とは、じつは、来世での生まれ変わりに希望を託すしかないほどに重い諦観からでた、思考停止と自己免責の言葉だったのではないだろうか。

飢えのなかでは、知性は育たない。判断力も生まれない。

いま、工業化のもたらす富は、都市住民の意識を変えつつあるという。流された学生たちの血も『マイペンライ』を変えていくはずだ。

タイ流血の民主化運動と母親たち

息子を失った悲しみを乗り越えて

松井 やより



クロントイのブルークさん



スラタニのスパンさん

今年五月、バンコクでの流血デモから一カ月後、アジアの人権団体が組織した事件調査団に同行してバンコクを訪問した。街の表情は一見平常にもどっていた。しかし、ピーク時三十万人の人々が埋めつくし、軍の発砲で血塗られたラージャダムヌン通りには、焼かれた警察署や官庁ビルの壁の弾痕などが事件を物語っていた。多数の負傷者が運び込まれて、またデモ参加者が逃げ込んで全員逮捕されたロイヤルホテル近くの道端では血まみれの生々しい写真集が売られ、事件のビデオを売る車のまわりには人だかりがしていた。

事件の傷は想像以上に深く、バンコクは、そしてタイは血を流し続けていた。民間の行方不明者ホットラインによると、四六人の死者（全員病院に運ばれたあと死亡）が確認されているだけで、デモ現場での死者の遺体は軍が運び去り、行方不明者は数百人にのぼる。

「今日も東北部から母親が一四歳の息子を採りにきた。母子家庭でその子はバンコクの部品工場働いて

いたが、友人とデモを見に行つたまま帰らないので、バンコクの病院や警察を尋ね回り、落胆していた」という。

バンコク最大のスラム、クロントイでも犠牲者は出ていた。息子のブルグ君(二〇)を奪われたブルークさん(五八)は呆然としていた。しわだらけの顔と白髪、洗いざらしのシャツ、貧しい生活に疲れ果てた感じで、「息子は港の労働者で、働きものでした。いとこと二人乗りのバイクで現場に向かったら、警察の近くで息子が突然バイクから崩れ落ちたそうです。撃たれたんです。病院に運ばれて死んだので遺体は引き取りました」とだけ話すのがやっとで、悲しみをこらえていた。「息子を殺し、傷つけた軍人たちが罰せられもせず、このバンコクにいると思うと怒りがこみあげる」とスラムの母親たちは叫んだ。

タイ南部スラタニからバスで十一時間かかってバンコクに来たマリ・スパンさん(四四)は七年前に夫を亡くし、ゴム園で働きながら、二人の

息子を育てていた。長男のチャイラート君(二〇)はバンコクのカレッジで電子工学を学んでいた。「息子の友人からの連絡で病院にかけつけましたがすでに死んでいました。四月末、帰郷したときに会ったのが最後です」とマリさんは涙をぬぐいながら語る。

「あのとき、息子は、僕はおふくろのことが心配だから本当はデモに行きたくない。でも、僕はスジンダが許せない。政治はやらないうと何度も約束しておきながら、選挙で選ばれた議員でもないのに首相になったウソキだ。それに、われわれのような小さなゴム園を助けるなどしない。友達も参加するし、僕も参加する。そういうので、どうかデモには行かないでと頼んだんです。でも参加の気持ちが変わらないというので、それなら行きなさい、でも気をつけて、いいました」

「そのとき、武器も何も持っていない平和なデモ参加者を虐殺するなんて考えもしなかった。息子から聞いたスジンダ、イサラボン、カセットの三人の軍人は責任をとるべきです。

在日タイ女性が見た日本

白石アンチヤリーさんは語る

「女性の地位」

私は日本に来てから五年になりましたが、この間、日本の女性についていろいろ感じるがありました。例えば、日本の女性は結婚したら会社をやめることが多いと聞きました。会社をやめて家の仕事だけです。日本では男は仕事、女は家庭を守るという考え方が普通です。だから、女性は仕事をしてもいつでもやめることができるパートタイムのような仕事が多いのです。

私の国タイでは、女性が仕事をし、高い地位につくのは普通のことです。大学の先生など五〇%くらいは女性だと思えます。公務員でも女性が管理職になることはめずらしくありません。

タイは農業の国で、国民の八〇%は農民です。農業では、女も男も力を合わせて働かなければなりません。また、東南アジアは母系社会で、タイでも農村では一番下の女の子が家を継いで父母の面倒を見るのが普通です。

都市でも女性に対して「どこで働いていますか」と質問するはあたり

まえの事です。その時「家の仕事をやっています」と答えたなら、家で店をやっていることと思うでしょう。

もちろんタイでも女性を中心に家事をし、子供の面倒を見なければなりません。その時はおじいさん、おばあさんをふくめた家族全員で助け合う習慣があります。経済的にまぐまぐしている人々はお手伝いさんをやって仕事に出ます。

女でも男でも働けるのに社会的な職業についていないという事は良いことではないと考えます。

このようなタイでは、男女の差より経済的な貧富の差の方が大きい問題だと思えます。

男女の地位や関係は、それぞれの国の歴史や習慣や宗教によって異なる難しい問題だと思えます。しかし日本の女性が社会的な仕事につくチャンスが少なく、その能力を表すことができないとしたら、とても残念なことです。私は日本の社会の中で生きてゆくのですが、夫の下にある妻、子供のためにある母ではなく、お互いに尊敬し、相談し合えるパートナーとしての妻であり、母であり、女性でありたいと思えます。

「日本の豊かさ」

今、東京が抱えている大きな問題の一つはゴミだそうです。ゴミの量が多いのには驚きました。これが本当に豊かな印なのかと思います。ケーキを買ったと、ケーキを包むセロハン、箱、箱の包装、箱を入れる袋がついてきます。これらが全部ゴミです。私には無駄の象徴に見えます。首をかしげたくなることはほかにもあって、育児のことです。日本の子供は欲しいものが何でも手に入ります。私が子供を預けている保育園の前にもちや屋さんがあります。そこで、子どもが泣くと何でも買ってくれる人がいます。デパートでも床に寝転がって大声をあげている子供をよく見ます。これでは、子供は泣けば何でも買ってもらえると思ってしまう。

このようなことで、子供たちの豊かな心が育つのでしょうか。

日本人は物は豊かでも、心は貧しい部分があるのではないかと思えます。欲求ばかりが高まり、新しいものをどんどん買って古い物は捨ててしまふ。欲求で、ストレスばかりがたまっているように見えます。物だけを豊かさの基準とする考え方に慣れてしまつて、多くの日本人が「東南アジアは貧しい」という固定的なイメージしかもっていません。

世界のだれも彼らを許さないで下さい。かれらは息子やタイ国民を大勢殺した罪を罰せられるべきです」と、マリさんは彼らへの恩赦に憤慨するのだった。

死者に対して政府はわずかに葬祭料一万バーツ(五万)、援助(補償)金十萬バーツ(五〇万円)を払うという、マリさんは「そういうお金は貧しくて学校へ行けない子どもたちのための奨学金に使いたい」と、亡き息子の名をとって「チャイラート基金」を設けるという。

彼女自身、月三千バーツ(二万五千円)の収入があるかないかのギリギリの生活で、息子の学資は親戚の援助に頼っていた。母思いの息子が将来支えてくれるという期待も断ち切られたのに、もっと貧しい子どもたちを助けることを考える。チャイラートは帰ってくるたびに、ゴム園の仕事や豚の世話をして、十歳の弟にもやさしかった。とてもしつかりした考えを持って、貧しくても一生懸命勉強していた。あの子を忘れないための基金です。

母親たちの未来、タイの未来を担うはずだった美しい魂の若者の命が奪われたのだ。しかし、貧しい人々の側に立つ民主的な政府をという願いは、武力によってつぶせず、今も生き続ける。

確かにタイでは、冷蔵庫や洗濯機、レンジなどがない家が多くあります。しかし、人々は心豊かに暮らしています。日本人もそこを見てほしいと思います。

「友人になりにくい国」

日本で一番むずかしいことは日本人と友だちになることです。上智大学の学生だったころ、言葉は大変だし、家族もいるし、二、三倍勉強しないとついていけない状況にいた私に「ノートとるの大変でしょう」となど聞いてくれた学生はただの一人もいなくて、私の方でお願いしなければなりません。

卒業して今は子供が保育園に行っているのですが、お母さんたちに接するわけですが、つき合うようになるまでに三年もかかりました。子供同士が友達になって初めて親ともしたしくなつたわけです。

タイ女性の事件のことを話しても日本人は「かわいそう」「仕方がない」という程度で、中には「わが国に来てあんなことをやって」と冷たい反応のことも多いのです。なぜ、あんな事件が起こるのかを知ってほしいですね。それにはもつとタイ人とつき合つて、タイのことを身近に感じることではないでしょうか。

※略歴 日本人と結婚して八四年来日。長男を育てながら上智大学を卒業し、現在は裁判所でタイ語通訳として活躍。

私たちは、こうした活動をしています

女性・人権・開発(WHID) グループ

様々な問題が指摘されている現在の開発のあり方を、アジアの仲間たちとともに、女性と人権の視点で問い直していくのが、私たち『女性・人権・開発(WHID)』グループの目標です。これまで、第三世界の女性を招いての、学習会やシンポジウムの開催、JICAへの提言、日本のODAプロジェクトの現地の女性への影響調査やスタディーツアーなどを行ってきました。しかし、出稼ぎ問題や日系の進出企業、観光開発問題など、ODA大国日本に暮らす私たちが取り組むべき問題は山積みしています。海の向こうで頑張っている仲間たちの明るい笑顔に支えられて、「同じ地平に立って、できることから」を合い言葉に、女性の視点からのODA監視や開発教育などの活動を続けています。当面は「誰もが参加できる『女性・人権・開発』ワークショップ」のマニュアル作りに取り組んでいます。会合は月に一、二回。まず行動することが何より

立ち寄り サポートセンター

日本に滞在している他のアジアの国から来ている女性、特に出稼ぎ女性をサポートする目的で、八九年春に活動を始めました。最初は月一回のパーティを一年くらい続けました。だんだん相談などが持ち込まれてきました。しかし最初に私たちがターゲットにしていたバーなどで働いているアジア女性とはなかなか知り合うことができません。たまたま、荒川区町屋に住んでいる会員が近くに住んでいるフィリピン女性と知り合いになったので、九一年一月、その会員の自宅で日本語教室を始めました。それから約二年、現在は平均二〇人の生徒が参加する大きな教室になりました。ほとんどが日本人男性と結婚した二〇代のフィリピン女性ですが、最近タイ女性も加わりました。人数が増えたので、九一年秋から近くにある町屋広場館を借りています。現在は、この日本語教室とケ

タイ女性支援基金

一九八九年『タイ女性の友』の出稼ぎ女性支援プロジェクトとネットワークを作ることから(具体的には活動資金を送る)始まりました。弁護士的女性が中心となってタイの出稼ぎ女性の人権を守るとい活動の主旨に賛同して多くのカンパが寄せられ、毎月一万バーツ(五万五千円)を送り続けました。この間九一年に

“女性の家サーラー” 神奈川県内に9月オープン

昨年(一九九一年)の夏から、神奈川県内の外国人問題に関わるグループが集まり、県内にシェルター(外国人女性のかけこみ寺)をつくる準備を始め多くの方々のご協力により九月開設しました。アジアの女たち

PP21 出稼ぎ女性ワークショップ

PP(ピープルズ・プラン) 21は一九八九年夏に日本全国一九か所の国際民間行事が行われ三五〇名の海外参加者とともに「水俣宣言」を採択してから三年。南と北、都市と農村、男と女などが分断した構造を越えて、「民衆がつくる」社会、もうひとつの「今のようでない」世界を構想しようという草の根の国際交流が広がっています。それぞれの地域、拠点、問題意識から始まった運動といえます。海外の人々の動きと合流し、アジア太平洋の人々は何を求めているのか。私たちの考えや状況とどこが違う、どこが似ているのか。私たちはどう助け合って、巨大なシステムに対抗し、自立しあえるのか。二回目のPP21はタイで開かれます。

民主化を求めて一〇数万人の民衆が立ち上がったあのタイで……。タイPP21:メインタイトルは、「地域、国、国際レベルでの参加民主主義。民衆が主役、民衆に力を。」。一月二〇日から二月四日まで、タイ各地でタイ民衆と海外参加者による二〇のワークショップが開かれます。農民、漁民、労働者、女性、少数民族、スラム居住者などの階層別の議論と、環境、第三世界ツーリズム、文化、宗教、消費などテーマ別の議論の場が組まれます。それぞれの成果は、一月六日から九日までのメインフォーラムの場に集約され、一月一〇日バンコクの大広場で行くピープルズ・フェスティバルに合流します。

開催の目的

一、海外におけるタイ女性の状況について、海外支援団体からの報告
二、北部タイ女性グループと海外女性グループのネットワーク作り
三、日本におけるタイ女性のおかれた状況を報告できる場と考え、充実した会議となるよう、積極的に関わりたいと思います。日本からは一〇名前後と他のアジア諸国から数名の参加を予定しており、アジアの女たちの会からは四、五人が出席する予定です。

活動報告 (1990-92)

- 1990年
 - 4/5月 「アジアの観光と児童買春国際会議」(タイ・チェンマイ)3名参加
 - 5月 「開発・援助と女性-ODAを女性の視点で問いなおそう」シンポジウム PART 1
 - 7月 「タイの山岳民族」-ピバットさん-講演会
 - 10月 「開発・援助と女性-私たちがからのJICAへの提言」シンポジウム PART 2
 - 10月 海外青年協力隊員の買春についてJICAと協力隊へ公開質問状
 - 11月 JICA(開発協力事業団)へ「ODAに女性の視点を!」申し入れ
 - 1991年
 - 1月 東京町屋での日本語教室オープン
 - 2月 海岸戦争への抗議
 - 3月 Asia Feminist Art Festival
 - 4月 「開発・援助と女性-これでいいのか」JICA提言・今求められる開発とは」シンポジウム PART 3
 - 4月 関東外国人労働者問題フォーラム参加(大宮)
 - 4月 英文機関誌 8号-(出稼ぎ女性特集)発行
 - 6月 フィリピンでの日本人男性2人の児童買春事件に抗議
 - 6月 「アジア出稼ぎ女性の実態を考える会」(みずらと共催)
 - 9月 合宿(東京:テーマ買春)
 - 9月 タイ女性支援基金メンバー訪タイ
 - 9月 滞日アジア女性支援ワークショップ
 - 10月 「ヒーノート(タイ)さんの話を聞く会」主催 従軍慰安婦問題行動ネットワークに参加
 - 1992年
 - 2月 「下館事件タイ3女性を支える会」発足集会参加
 - 2月 水曜フリートーク(第1回「アジアと私」中原理道子さん)
 - 3月 水曜フリートーク(第2回「従軍慰安婦」朴和美さん)
 - 4月 第2回関東甲信越外国人労働者問題フォーラム(高崎)参加
 - 5月 「帰らぬ少女」スライド上映と講演会
 - 5月 国連世界人権会議(93.6)に向けて「女性の人権を議題に」と世界請願署名運動
 - 6月 P.K.O.法案反対行動
 - 7月 合宿(小田原)「買春防止法をつくらう」
 - 8月 「ラッターナさん(タイ・カトリック正義と平和委員会)を囲んで」集会
 - 8月 タイへのスタディーツアー(人権・開発・女性グループ)
 - 9月 「ローズ・マリー・チッキーニさんにネパール女性と開発について話を聞く会
 - 10月 英文機関誌 9号(女性から見た日本のODA特集)発行
 - 11月 15周年記念シンポジウム開催
 - 11月 機関誌21号「特集タイ女性はなぜ日本に?」発行
 - 12月 PP21の一貫としてチェンライ(タイ)で「出稼ぎ女性ワークショップ」主催
- *2か月に一度、ニューズレター「アジア・シスターフッド」発行

機関誌「アジアと女性解放」

- 第1号 韓民主化闘争の女たち 300円★
- 第2号 買春観光を許すな! 300円★
- 第3号 日本企業は海外で何をしているか 300円★
- 第4号 アジアへの文化侵略 300円★
- 第5号 いま戦争責任を考える 300円★
- 第6号 アジアの闘う女たち 400円
- 第7号 女と国籍 300円★
- 第8号 続・買春観光を許すな! 400円★
- 第9号 第三世界の女と私たち 400円
- 第10号 光州一周年によせて 400円
- 第11号 特集・暮らしの中のアジア 400円
- 第12号 特集・戦争と私たちとアジア 400円
- 第13号 特集・8・15とアジア 400円
- 第14号 特集・侵略と性 400円★
- 第15号 特集・全斗煥の訪日を許さない 400円
- 第16号 特集・アジアの女と人口政策 400円
- 第17号 特集・アジアの女たちの詩 400円
- 第18号 特集・開発と女性 400円
- 第19号 特集・暮らしの中のアジア Part 2 400円
- 第20号 特集・アジアからの出稼ぎ女性たち 400円

★印は残部がありません。送料は1部170円です。郵便振替か切手代用(60円切手)で申し込んで下さい。郵便振替 東京0-46143

ASIAN WOMEN'S LIBERATION English Edition Now Available!

- No.1 Asia and Women's Liberation ¥300★
- No.2 Japanese Economic Invasion ¥400
- No.3 Prostitutio Tourism ¥400★
- No.4 Asian Women in Struggle ¥400★
- No.5 Blown by The Winds of Asia ¥400★
- No.6 Sex Tourism and Military Occupation ¥400
- No.7 Asian Women and Population Policy ¥500
- No.8 Asian Migrant Women Workers in Japan ¥700
- No.9 Women in Development ¥700

Address(for Order):
Asian Women's Association
Shibuya Coop Rm.211 14-10, Sakuragaoka,
Shibuya-ku, Tokyo 150 Japan

小冊子 水曜フリートーク集 —アジアとわたし—

- 各界で活躍中の女性がそれぞれの「アジア」「女性」を語りました。
- ①「アジアとわたし」 中原 道子さん
 - ②「在日女性が語る慰安婦問題」 朴 和美さん
 - ③「女の目で見えた中国」 田畑 佐和子さん
 - ④「買春・性的商品化にどう対応する?」 高里 鈴代さん
 - ⑤「売買春いま・むかし」 大島 静子さん
 - ⑥「女性の人権・買売春」 林 陽子さん
- お申し込みはハガキで「アジアの女たちの会」まで

人権 第三世界と日本

「たみちゃん」と南の人びと
中学生の目で考える第三世界
スラムの環境・開発・生活誌
アジア・ラテン・アメリカの貧困と自立
アジア・ラテン・アメリカの自立
スラム住民の闘いと開発の未来
アジア系輸入品のオパールと環境
サムシヤヘト、韓国手紙 2000円
「国際国家日本との闘い」18か月
アジアから来た由緒書たち
内海聖子、松井やより 1648円
激増するアジア人労働者の姿は
従軍慰安婦 元兵士たちの証書
西野留美子 1700円
百人をこえる取材から描く実態
現代世界の「人権」
アムネスティ国際報告① 2000円
アムネスティ国際報告② 2000円
各国別・地域別の最新人権状況

明石書店 〒113 東京都文京区本郷1-13-4 図書目録送呈
TEL 03(3818)6351 FAX 03(3818)5962 振替/東京0-24505

あなたも会員になりませんか?

女にとってアジアは一見遠い世界のように見えますが、実はとても身近なのです。フィリピンのバナナ、インドネシアのエビ、スリランカの紅茶などが私たちの暮らしの中に入り、アジアからの出稼ぎ女性や留学生たちや花嫁さんなども増えています。

一方、日本の男たちがアジアの女たちを買いに出かけたり、日本の企業が進出してアジアの女性たちを安く使っています。

そんな日本の社会を変え、私たちの生き方を問い直すためにも、会に参加して、共に学び、行動し、アジアの女たちとのつながりを作りませんか。

専従もいない会ですのでボランティアとして会を支えて下さる方を歓迎します。

- ニューズレター発行 「ASIAN SISTERHOOD」 随時会員に配布
- 入会方法 維持会費(年6,000円)を郵便振替 東京0-46143 アジアの女たちの会宛に「入会申し込み」と明記して送付して下さい。(現金書留不可)

●三年間休刊した機関誌をアジアの女たちの会十五周年に向けて再刊しました。タイ女性の人権侵害状況を支援活動を通して知った以上、その実態を隠しておけないと思っただけです。強引な原稿の催促、すみませんでした。仕事のあと疲労困憊しながらの編集作業、ご苦労さまでした。(松井やより)

●言葉の壁はあるものの、この特集をタイから日本に働きに来ているすべての女性にささげたい気持ちです。重いテーマで、しかも短期間の編集作業でしたが機関誌を作る楽しさも味あわせて頂きました。ありがとうございます。(村田則子)

●人身売買のあまりにも凄まじい状況に、ただただ驚くばかりです。いったい日本の男は、何を考えているのでしょうか。永田町の政治と聞いて、買春と聞いて、もう絶望の極みです。(須田幸子)

●昼間忙しく働いた後で、夜中まであんなにたくさん文章を、テキパキと締め込んじやって、すごいなあ。というのがほとんどなんにも手伝えることがなくて、ただ眺めていた私の実感。(能勢美保子)

表紙デザイン・レイアウト: 能勢美保子/カット: 渡辺美冬/編集: 村田則子・渡辺美冬・安江とも子・松井やより・須田幸子・富山妙子/写植版下: (有)レプリ/印刷: (有)だいま印刷

帰らぬ少女 日タイ・アーティストによるスライド

制作スタッフ
絵・詞: 富山妙子 絵: ジャラシィ・ループカムティ
音楽: 高橋悠治・カラワン楽団
語り: 中山千夏・金久美子・洲永敬子
語り: 原一男と疾走プロ
映 像: ジット・プミサク カラワン歌集
詩: スリチャイ・ワンゲオ・荘司和子
訳: スリチャイ・ワンゲオ・荘司和子
制作/火種工房

スライド・セット カラー100コマ 上映時間28分
頒価3万5千円 貸出し料(4日以内)1万3千円(送料込み)
お申込み: 郵便振替・東京7-37311 火種の会 Tel・fax 03(3425)6095

火種工房 東京都世田谷区桜丘4-16-2 〒156
Tel. 03-3425-6095